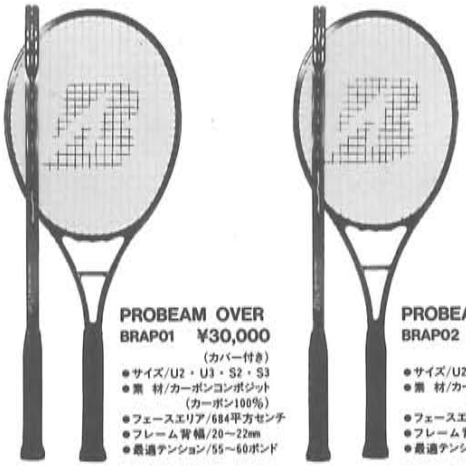
設立30周年

多摩社会人庭球連盟

BRIDGESTONE

精度の高いパワーボールを実現

新設計Ⅱ型フレーム構造採用



PROBEAM OVER
BRAP01 ¥30,000
（カバー付き）
- サイズ/U2・U3・S2・S3
- 素 材/カーボンコンポジット（カーボン100%）
- フェースエリア/684平方センチ
- フレーム背幅/20〜22mm
- 最適テンション/55〜60ポンド

PROBEAM MID
BRAP02 ¥30,000
（カバー付き）
- サイズ/U2・U3・S2・S3
- 素 材/カーボンコンポジット（カーボン100%）
- フェースエリア/614平方センチ
- フレーム背幅/19〜21mm
- 最適テンション/53〜58ポンド

新登場

PROBEAM

Ⅱ FORM STRUCTURE

Over & Mid

ブリヂストンスポーツ株式会社 テニス・バドミントン事業部 〒101 東京都千代田区神田東松下町45 TEL.(03)3257-4110

目　　次

				頁
多摩社会人庭球連盟設立30周年に寄せて	日本体育協会	会　長	高原須美子	2
一人でも多くの人と	連盟	会　長	下村按理	3
設立30周年へ寄せて		名誉会員	桑原義美	5
テニスと私		〃	牛山智鶴	5
思い出と思い残し		〃	柴田　久	7
テニス・ラケット雑感		〃	神保喜一	8
メモリアルデー		副会長	石井康雄	9
テニスの切手		〃	渡嶋八洲夫	10
大会運営について思うこと		〃	岡本公夫	11
ゴールドメダル		理事長	吉村　正	11
私とテニス		副理事長	門倉貞夫	12
連盟と共に24年		〃	中込好雄	12
15年目の想い		〃	市来惟明	13
ユニークな団体戦と不文律		理　事	沖津博義	13
多摩社会人庭球連盟に寄せて		〃	碇本鎌一	14
多摩社会人庭球連盟に寄せて		〃	鈴木晃郎	14
４対４のすばらしさ		〃	吉本静三	15
多摩社会人の今後を考える		〃	丸山　寛	15
多摩社会人庭球連盟30周年にあたり		監　事	大平　眞	15
連盟とともに		〃	木村　貢	16
多摩社会人の方々との出会い		理　事	高久　務	16
多摩社会人庭球連盟創立30周年に寄せて		〃	平岡克英	17
テニスがうまくなる秘訣		〃	前川悦一	17
理事とてしメンバーとして　２つの顔		〃	伊藤眞理子	18
和		〃	武藤　功	18
ダブルス選手権担当を経験して		〃	桜井吉雄	19
私流テニスよもやま話		〃	斎藤慈子	19
多摩社会人をふりかえって		〃	山崎美弘	20
テニススタイル		〃	山口恵美	20
コミュニケーションの充実に向けて		〃	三村　到	21
テニスを楽しむために		〃	木甲斐節生	21
実力200％発揮		〃	萩原恒夫	22
30周年に寄せて		〃	内田廣一	22
理事に選ばれて		〃	望月寛子	22

第60回（６年秋）団体戦々績	24,25
ダブルス選手権戦績	26
Ｏ.Ｌ.リーグ成績	27
分布一覧	28
30年の軌跡	別紙折込
役員親睦会写真	23
30周年記念指導者講習会写真	29
広告	表紙ウラ　裏表紙ウラ　30

多摩社会人庭球連盟設立30周年に寄せて

財団法人　日本体育協会
会長　高　原　須美子

みんなが生涯にわたって、スポーツを楽しむ時代となり、欧米のように、地域がスポーツの拠点として注目されています。チームに地域名を必ずかざしたサッカーのＪリーグの人気は、象徴的な現れといえましょう。

多摩社会人庭球連盟は、30年前にスタートしたと聞き、今日の地域スポーツの動きを先取りした先見性に感銘を受けました。連盟のまとめ役が、私の主人の旧制中学の同窓生で、家族ぐるみのおつきあいをしている下村さんです。下村さんが、趣味としてのテニスに情熱を注ぎ、テニスの出来る環境づくりに力を入れていられることは、折にふれ伺っていました。30年前の先見性は勿論評価されなければなりませんが、30年間続けてきた継続性はもっと高い評価を受けるでしょう。

連盟設立30周年おめでとうございます。心からお祝いを申し上げるとともに、深甚な敬意を表します。

「みんなでスポーツを！」「スポーツ・フォア・オール！」が、日本だけでなく世界の合い言葉となっています。その原点とも云える連盟が、“草の根テニス”の輪を、ますます拡げ、スポーツを通して、豊かな市民生活を営む人が、一人でも増えることを目指して活躍なさるよう期待しています。21世紀へ向けて、次なるご発展をお祈り申し上げます。

一人でも多くの人と

会長（S45～）
下　村　按　理
（多摩平ク）

昭和40年に、４団体、４チーム、100人足らずのメンバーで発足した私達の連盟が、30年後の今日、120団体、183チーム(60回大会参加)、5,000人をこえる登録会員を擁する大組織に迄成長発展したことは、真にご同慶の至りであります。皆さんと心から喜びを共にすると同時に、これまでに至った軌跡を解析し、今後益々の伸長を期したいと思います。　　まづ、

1.組織について

私達の連盟は、従来からあるテニス愛好者の組織を横断的に網羅したものです。実業団チームあり、地域のテニス・サークルあり、はたまた、営業クラブの会員有志チームもあるというように、およそテニス・クラブと名のつくもののすべてを包含しております。又メンバーは、一般社会人であれば、ハイティーンの女性から、実業団のメンバーとして全国大会に出場している人、さらに、60代70代のグランド・ベテラン迄、年齢・性別一切関係なし、学生でなければ、勤労者は勿論、家庭婦人でも、悠々自適の余生をテニス三昧で楽しんでいる人もすべてが仲間であります。これらの仲間達が、常にひとつのコートで技を競い合うという組織は、恐らく日本(いや世界？）中に、二つとないものではないでしょうか。

２．試合形式について（その一）

私達の連盟の行事は、春・秋の団体戦（及びO.L.リーグ）がメインであります。この団体戦は、チームごとに、３シングルス、５ダブルスの選手を一組として出場させることが出来ます。一団体ごとに、２チーム或いは３チーム（いずれも年令･性別を問わない）以上出場させることも可能です。こうして出場したチームは、概ね16チームごとにひとつの部をつくります。現在は１部から12部迄あります。180チームの参加ということは、１チームで実際その日に試合をするのは、単複重複出場を認めていますので、10人乃至13人、当日どうしても都合のつかない人が出るのはさけられませんから、チームとしては、15人～20人位のメンバーが必要となります。（15～20人）×180≒登録人員の約1/2ということになります。

この部制は、30年60回の大会を閲して出来上がったもので、２部から12部の、ベスト４に残ったチームは、翌シーズンはひとつ上の部に昇格し、同時に１部から11部迄のコンソレ敗者４チームは、ひとつ降格となります。

この結果、大きく力の差のある対戦は無くなり、相拮抗した力の持ち主どうしの対戦となり、白熱したゲームが繰り拡げられるわけです。

３．試合形式について（その二）

３シングルス、５ダブルスの８ポイントの戦いですから、往々にして、４対４となることがあります。この場合得セット数、さらに得ゲーム数によって勝敗を決めます。従ってどの対戦も、１ポイントでも、１ゲームでも、或いは敗色濃厚の試合であっても、１セットでも多くとろうと頑張ることになります。「逆転満塁さよならホームラン」の無いテニスの真骨頂をそこに見る思いがします。

過去に何回か見られたことですが、得ポイント、セット、ゲーム数迄全く同じであった場合に限ってNo.１ダブルスをとった方の勝となります。

４．ボランティアリズム

私達の組織は、全くボランティア活動によって支えられております。外部からの経済的な支援は、びた一文入っておりません。現在30人にのぼる役員も、各団体の責任者も、専従者は１人もおりません。

皆が自分たち全体の楽しみのために ―― 時と場合によっては家族ぐるみで ―― 献身しています。

その結果、加入団体の負担は、年会費10,000円、団体戦参加費１チーム5,000円という低額に据え置かれています。仮に15人の加入団体であれば、１人年額1,000円（ボール代を除く）、5,000人120団体ですから平均すれば、登録会員１人当たりでは僅か年間400円（同前）ということになります。

こんな低額会費で楽しめる組織が他にあるでしょうか。全く会員全団体の協力と、役員各位のボラン

ティアリズムによって支えられています。

5．母体の理解と支援

現在の日本で（他のアマ・スポーツにも共通する問題ですが）テニスを楽しむ為の最大の隘路は、コートの確保です。

コートは

イ．公共施設　ロ．企業の福祉施設　ハ．営業クラブコート　ニ．貸しコート

等がありますが、私達の使えるのは、ロ．しかありません。しかし企業のコートは、飽く迄その企業の従業員の福祉の為の施設として設置されているもので、概ねその企業に直接間接関係のある人にしか使用が認められておりません。

私達の会員団体で、福祉施設としてテニスコートが設けられている企業チームは、相当数ありますが、それらの母体企業の大多数が、私たち連盟の事業についての深い理解の下に、コートを提供してくださっております。この事無しでは、私達の連盟は存続し得ないのであります。

誌面をかりて厚く御礼申し上げます。

勿論これで充分ではありません。最近頓に増えているコートを持たない団体のチームどうしの対戦では、しばしば１面１時間当たり1,500円～3,000円の貸しコートを利用せざるを得ないのが現状です。

以上の諸点について考えて参りましたが、私達の事業が、スポーツ振興、斯道発展の為、飽くまで「草の根テニス」としての道を追求してゆく限り、今後とも成長を続けて行くであろうことは、ほぼ間違い無いと思いますが、この際将来の方向について、現状での問題点の解決策を探る意味で、些か私見を申し述べたいと思います。

①　基盤の確立と社会的認知について

私達の組織は、現状は単なる任意団体にしか過ぎません。従ってその基盤は極めて脆弱であります。又、社会的にも認知されておりません。今後の発展を期するには、出来ることなら公法人（財団或いは社団法人）の認可を得たいものであります。法人化することによるメリット（公的助成なり公共施設の利用等）と同時に、社会的に認知されることが期待されます。

②　テニスマンとしてのマナーについて

所謂ブームに乗っかって、テニスらしきことをした多くの人も、ブームの沈静化と共にその殆どが消えて行きました。私達真にテニスを愛する者は、ブームに関係無く着実に増加しております。

しかし、実際にコートに立ったとき、技術的には、随分進歩し、上手く強くなっていることは感じられますが、テニスマンのマナーということになると、首を傾けざるを得ません。

クレイコートが種々の理由により減少したことにより、コートを始め施設や道具に対する愛情の念が薄れてしまいました。又、「礼に始まり礼に終わる」と迄は申しませんが、テニスマンとして、相手に対し、仲間に対し謙譲の心を失っている人が、何と多いことでしょう。コートの入退場に際し、「御世話になります、どうぞ宜しく或いは有り難うございました」と軽く一揖する人なぞ、まずお目にかかれますまい。

疑わしきは相手方有利に判定するのがセルフジャッジの基本的なマナーです。それが出来ない人に、テニスを語る資格は無いと言っても過言ではありますまい。

勝負にこだわる余り、プロスポーツの観衆のような声援を送るサポーターは、コートサイドから出ていって頂きたいものです。

企業をめぐる社会的環境が、いろんな意味で厳しいものになっている今日此頃、連盟の仲間の企業の施設も、それを使わせて戴く以上、充二分に心して、迷惑をかけることのないようにしなければなりません。

テニスは精神的に「紳士・淑女のスポーツ」でいつづけて欲しいものです。

初めてラケットを握ってから50有余年、数多くの思い出と共に、多摩地区の「一人でも多くの人と」、体力の許すかぎりテニスを続けたいと念願しております。

設立30周年へ寄せて

名誉会員（S.40～53　副会長）
桑　原　義　美
（コニカ日野）

先日はわざわざお電話有難うございました。

今回の寄稿については先日のお電話の折にも申上げたように、余りにお役に立っていないので、気恥ずかしく、出来たらお断りしたいと思っていたのですが、お言葉に甘えて駄文を書かせて戴きました。どのような事を書いたらよいのか迷った挙句、月並な事しか書けておりませんので、30周年記念誌に掲載するのに相応しいような気はしません。文章を適当に取捨選択して戴ければ幸です。

39年暮に鳴海氏宅で打合わせをした時の事は今でも鮮明に覚えていますが、その時は素人が楽しめるものを作ろうではないかというような空気で、とても今日のようなものではありませんでした。それを、ここまでもってこられた下村さんの執念とご努力にはほとほと感じ入る次第です。今後もどうかお元気で当連盟の発展にご尽力下さい。

設立30周年おめでとうございます。設立当初の事を思い出してみますとまるで夢のようですが、それにしても30年間チーム数で30倍、参加人員で50倍の成長をとげたという事は大変な事だと思います。下村会長を始めとして、当初から一貫して当連盟の発展にご尽力された方々のご努力に改めて深甚な敬意を表したいと思います。私などは、当初の小さかった時代しか知りませんが、それでも日程の調整やコートの確保等に皆様が大変なご努力をされていた事、試合当日の何とも言えない高揚した感じなどが今更のように思いだされます。このように大発展を遂げた連盟が、益々発展を続けているという事は、役員各位のご尽力はもとより、参加会員各位の一方ならぬご努力あればこそと思いますが、それにつけても、毎日の生活の場においては寸暇をも惜しむような仕事をされている方々が、貴重な時間をさいて戴けるテニスの魅力という物についても改めて感じ入ってしまいます。

私はテニスについて人に語れる程の腕前ではありませんが、テニスをやる人は皆よい人で、コートでお手合わせをすれば知らない人でもすぐに心が通い合うようになってしまうのもテニスの功徳ではないかと思いますし、そういう意味で随分得をしてきたと思う事が多かったのも事実です。来年は満で70才になる今日では週末のクラブテニスが生甲斐といってもいい程の楽しみとなってしまいましたが、これも当連盟でもまれたお陰かなあと考えたりしています。私は年をとってからゴルフを始めました。ゴルフも確かに面白いには違いありませんが、ゴルフはどこまでも孤独のゲームですし、ボールを打つ回数も少ないし、金も時間もかかりますから、動けなくなればともかくとして、どうみてもテニスの方が楽しいと思います。テレビに放映されてもテニスの方がずっと面白いのに何故ゴルフ程の人気がないのでしょうか。外にも理由があると思いますが、それは多分プレーする人の数が少ないからだと思います。当連盟の発展の方向は色々あろうかと思いますが、出来る事ならこの底辺の拡大を益々図るような事も課題の一つとして戴けたらというのが、奇跡の発展を遂げられた連盟への私の我侭な願望です。

テニスと私

名誉会員（S.42～61　副会長）
牛　山　智　鶴
（鉄道総研）

設立30周年おめでとうございます。

この度、連盟設立30周年にあたり、記念誌の投稿依頼を受けました。そこで、何を書こうか迷いましたが、設立メンバーの一人として、設立に至った当時の情況と、思い出に残る私のテニス人生について述べてみたいと思います。

私の前勤務個所は、鉄道技術研究所です。

昭和34年、所内の仲間数人と、硬式テニスを始めましたが、当時、テニスと言えば、一般に軟式テニスのことを言っておりました。ボールは殆ど輸入品で、スラゼンジャーが１個300円程度、確か、軟式の数倍したように記憶しております。当時としては大変高価なものでした。私は軟式テニスをやっておりましたが、ある日、田園コートで行われたデ杯の試合を見て感激し、「テニスをやるなら硬式だ」と決心しました。特に心を引かれたのは、スマートさと打球の音でした。そして自分も経験して、更に深い魅力をもつようになりました。あの打球感や、打球音に魅せられ、私のテニス人生は始まり、今日に

至りました。

鉄研では、昭和36年に硬式テニス班ができ、最初の１～２年間は所内で仲間とやっておりました。あるとき、私の知人を介して、小西六（現コニカ日野）の岸田さんから、親善試合のお誘いを受け、お邪魔したのが最初の対外試合で、昭和38年の夏だったと思います。試合後の懇親会で、同好の仲間を勧誘し、広めようという話題がでました。間もなく、小西六さんは、多摩平クラブさんを紹介し、私共は、日立中研さんに呼びかけて、仲間に入ってもらいました。最初は２チームで相互に試合をしたり、また、３チームが集まることもありました。このような親善試合を通じて、「多摩地区に、事業所を主体とした硬式テニスの仲間の会を作ろう」という話が自然に出てきました。

昭和39年、第１回の会合は鉄研の鳴海氏宅で、前述４チームが集って行われました。そこで決まった会名は、「三多摩硬式テニス同好会」と「三多摩硬式テニス連盟」の２案でした。初代会長には多摩平クラブの前田さん、副会長に小西六の桑原さんと鉄研の藤田さんが決まりました。事務局は鉄研で、私が担当することになりました。

発足時の会の目的は、「親善を第一とし、多数の人に参加してもらうこと」及び「技量の向上」でした。このような理由で、試合形式も、ダブルスを多くし、団体戦のみ５Ｗ、２Ｓでスタートしました。その後、会名の変更、個人戦のダブルス選手権、団体戦のシングルス、ＯＬリーグなどが追加されました。このことにより、連盟行事の内容も一層充実され、今日に至りました。

かようにして発足した会ですが、発足して間もない時期に、前田会長は仕事のご都合で現会長の下村さんにバトンタッチされ、今日に至ったのであります。

私は、昭和59年、鉄研の退職に伴って、18年間お世話になった連盟の副会長を辞退させて頂きました。退職後、中国政府からの招請で、吉林の大学に赴任しました。この大学には１面だけコンクリート・コートがありましたが、テニスコートとは名のみで、大きな、ひび割れがあったり、周囲のフェンスはボロボロの質素なものでした。そのうえ、ラケットやボールさえ、まともな物がない状態でした。そこで、日本から送ってもらい、満州時代に軟式テニスの経験があるという先生と、早速、始めました。私達が練習を始めると、何時とはなく、コートの周りは、学生でいっぱいになりました。非常に興味があったようです。間もなく、体育系（学部）から学生の指導を依頼されて、週３回やることになり、更に、市の教育委員会からも、休日に市主催の講習会の指導まで依頼されました。場所は市内のホテルのコートでした。本来、好きなことことでもあり、日中友好の一助になれば、更に良いことだと思ってやりました。天気のよい休日には、必ず市から迎えの車が来ました。

吉林の冬は非常に寒いのですが、熱心な人が多く、冬の寒い日でも迎えにくるので、仕方なく出かけたこともありました。マイナス20度の屋外でも経験しました。こんなときは、予備のボールをスチーム暖房のラジエターの上で温めながら。……しかし、すぐバウンドしなくなるが……このようなことにより、多くの友人ができたうえ、２年間の任期を終え、帰国するときは、市と大学からそれぞれ、身に余る名誉の賞まで頂きました。因みに本業の方は、感謝状でした。

毎年、秋には招待状が来ますが、なかなか雑用に追われ、参加できません。少し時間ができたら是非訪問したいと、その日を楽しみにしております。

私は現在、中国の友人と北京で日中合弁の小さなソフトウェア会社を経営しています。ここでもテニスを通じ、中国の友人ができました。中には政府要人もおり、ときどき、北京の首都体育館などで楽しんでおります。

中国では、まだ、一部の人のスポーツに過ぎませんが、近い将来には、一般にも普及され、テニスも強くなりそうです。

あとがき

私のテニス人生について、連盟創設時の思い出や、テニスをしていたことが、社会生活の中で、色々な場面で、思いがけない「援助者」になったこと。「芸は身を助ける」、芸は、私には、テニスであったことです。そして、これからも……

最初、４団体、４チーム、数十名で始めたこの連盟は、30周年を経た現在、120団体180チームを超す大きな世帯に成長されました。これは、私共が設立時に、想像も出来なかったことです。しかし、設立時の想いは綿々と継承され、その目的は充分に達成されていると思います。

この30周年を機に、従来の運営方法などを再検討され、より実状に即した、永続性のあるものに発展されることを期待するものであります。

最後に、連盟設立30周年の記念誌発行にあたり、投稿の機会を与えて下さった下村会長はじめ、役員各位に感謝の意を表し、貴連盟の益々の発展を祈念いたします。

思い出と思い残し

名誉会員（S.53～H.4　副会長）
柴　田　　久
（日本システムウエア）

私が、電波研（現在、通信総合研究所）チームを率いて、多摩社会人の試合に出たのは昭和43～４年頃だったと思う。当時はチャンピオン制が敷かれ、多摩平クラブが圧倒的強さでチャンピオンを続けていた。その初の総会で下村会長が「当連盟では、新人会員は、緒戦で強豪に当たって貰うしきたりである。」と話されたという。そして、その相手は３強の一角、鉄道技研であると聞かされた。それを聞いて、これは大変なことになったと思う傍ら、むらむらと闘志が湧き、未知の実力を試して見る気になったのである。しかし、団体戦は初めて、惨敗も覚悟で鉄道学園の会場に向かった。コートには初夏の日射しが降り注ぎ、満開の藤の花が長い房を垂れていた。

試合は幸運にも恵まれ、７：１で勝つことが出来た。そして、そのデビュー戦の勝利が自信となり、トーナメントを勝ち抜き、決勝に進み、小西六日野チームと対戦することになった。小西六は、鉄道技研と並ぶ強チーム、しかし、チャンピオンになったこともあるというからもう少し強いのかもしれない。諸戦の勢いを駆って勝ちたいと意欲が湧いた。しかし、チャンピオン戦との絡みで、指定された日は電波関係の行事のためレギュラーが出られず、かき集めのメンバーで戦う羽目ににになった。結果は当然、空しく涙を飲んだのである。

その年の秋も決勝戦の相手は小西六であった。序盤に０：３とリードされながらも、残り５戦で逆転し、春の雪辱を果たした。いよいよ、チャンピオン戦である。チャンピオンは無敵を誇る多摩平クラブ、試合場は多摩平コートである。トーナメントを勝ち抜いた自信をバックに、ベストメンバーを揃えて意欲満々であった。森に囲まれた公園の静かさを破って、試合は開始された。

電波研は善戦した。どちらが勝つとも解らず、手に汗を握る熱戦が続いた。試合は長引き、途中で日没、勝負は持ち越しとなった。ダブルス５つ終了時点で、多摩平クラブがポイント優勢ながら、シングルス３試合の結果によっては、逆転の可能性もあった。しかし、結局多摩平クラブに軍配が上がったが、全身全霊を打ち込んだあの試合の記憶は、今も強く心に残っている。

多摩平クラブには、この後も何ども挑戦したが、どうしても歯が立たない試合が続いた。漸やくチャンピオンを手に出来たのは、４度目か５度目位であったと思う。日野オフセットのコートに夕闇が迫り、見えないボールを追いながら、No.1Wの決戦を応援した時の感激は忘れられない。チャンピオン制は今はない。時代の趨勢であろうが、決勝戦とは一味違った緊張感を味い得たことは、幸せであったと思う。

電波研は幸運であった。最初に強豪に当てるしきたりが幸いしたのである。僅か１年で強チームの仲間入りをすることは今は出来ない。12部から出発すると、頭を出すのに６年は掛かる。老齢化と転勤を考えると、果して１部まで達することが出来たかどうか疑問に思う。

私が次に所属した日本システムウエア（ＮＳＷ）では事情が違っていた。高校で国体の県代表であったという逸材もあり、未完成ながら若い人材が揃っており、将来への期待は出来た。しかし、一番下の部に落ちたあとは、強力な新加入チームに手も足もでない状態が続いた。こうなると、志気は上がらず忙しさもあって練習の意欲は失われ、折角の人材も育たず、かの逸材を含めゴルフに転向する者が続いた。

電波研が加盟して２～３年後、私は理事に選ばれる幸運に恵まれた。チームが強かったせいと思う。自ら発想し思うことを提案できる。その最初の提案が２部制案であった。その頃、加盟団体が増えるに従い、トーナメントの日程消化が難しくなっていた。地域別制が取られたこともあったが、余り好評ではなかった。そこで２部制案が取り上げられたのである。この案は、下への拡張が可能な構造で、チーム数がいくら増えても困らない仕組みとなっている。事実、その後、部は増え続け、今では12部にも及んでいる。

しかし、このまま部の構成は、このまま無限に積み重ねて行って良いであろうか？そろそろ見直しの時期が来ていると思う。勿論、積み重ねが悪いと言うわけではない。ただ、電波研、ＮＳＷと対称的な２つのチームに所属して来た私には、両方から見て、その不合理が目につく。今のままでは、１部に近い実力のチームが、上から下まで各部に散らばって存在することになる。古きも新しきも、実力チームは上位で熱戦を展開し、発展途上チームは同レベルのチームと切磋琢磨出来る体制が望ましい。連盟は今後も益々繁栄し、部の構成は更に高くなって行くことと思うが、その高層をＡ、Ｂ、Ｃなどの層に分

かれ、入口を幾つか設ける方法は無いであろうか？在任中、このような案は否決された。確かに実行は難しいが、私としてはこれは思い残しである。

思えば、連盟とは長い関わり合いであった。理事としてまた副会長として皆さんに支えて頂いたご好意には感謝する。思い出に残る仕事としては、多摩婦人連盟の結成、ＯＬリーグの発足が挙げられる。両者とも今も盛んに活動している様を見て無上の喜びを感ずる。

連盟は、これからも更に大きく発展して行くであろうが、それにつれて色々難しい問題も出てくると思う。役員諸兄のご努力も大変であるが、最後にその方向を決めるのは、加盟120の団体の皆さんである。忌たんの無い建設的なご意見を寄せられ、多摩社会人連盟が、加盟180チームの隅々にまで気配りの行き届いた連盟として発展して行って貰いたいと思う。

テニス・ラケット雑感

名誉会員（Ｓ.50～58　副会長）
神　保　喜　一
（Ｉ.Ｈ.Ｉ　田無）

多摩社会人庭球連盟が20周年を迎えた時、私は仕事で英国に駐在しており、愚妻が代りに祝賀会のお招きにあづかりました。あれから早くも10年過ぎて今度、30周年を迎えたわけで“光陰矢の如し”を実感しております。30年前の記憶でいささか怪しいのですが第２回か第３回の大会で、我が多摩平クラブは優勝しました。私も複のＮｏ.4かＮｏ.5で出場したことは確かですが、優勝に貢献出来たのか、足を引張った組なのかは定かではありません。当時の多摩平のメンバーは、前田（前会長）、下村（現会長）、吉村（現理事長）、八木（吉村さんの大学のテニスの先輩）の諸氏と他にも錚々たるメンバーが揃っておりましたが、我々の誰もが秘かに吉村さんの単・複の２勝を期待していたことは言うまでもありません。優勝した翌年から私は勤務先であるＩＨＩのチームに移りましたが、以来二度と優勝の美酒を味わうチャンスは回ってきません。

当時は木製ラケットの時代でアルミや鋼製も僅かに見られましたが、カワサキ・ミヅノ・フタバヤなどの木製ラケットが圧倒的に多く使われていました。

硬式テニスの魅力は（軟式テニスを少しかじっていた私には）木製ラケットでボールを打った時のコーンと響く快音と、あの充実感のある打球感覚にあったようです。私が炭素繊維強化樹脂製（ＣＦＲＰ製）のラケットの使用に後々までこだわったのも、そのプッシュと言う音といささか頼りない打球感になかなかなじめなかったからです。

今やＣＲＰ製デカラケ全盛の時代ですが、私には“ＣＦＲＰ”には特別の思いがあります。昭和40年頃、英国のロールス・ロイス社（ＲＲ社）が航空エンジンのファン（エンジンの一番前面にある大きな羽根車）の羽根にＣＦＲＰ材を使って新しいエンジンを開発していることを知りました。これに刺戟されて我々も航空エンジンの部品にこのＣＦＲＰ材を応用する研究を始めました。研究は順調に進みましたがそれも僅か２～３年で、突然破局がきました。飛行試験までして成功したかに見えたＲＲ社のエンジンからＣＦＲＰ製の黒い羽根が消えたからです。結局黒い羽根ではエンジンに大きな鳥が飛込んだ時の強度が不足だったからで、これを知って我々の研究も終止符を打ったのは昭和45年の晩秋でした。

それから10数年が過ぎて、ＣＦＲＰ製デカラケの時代が来ました。我が家には10数本の木製ラケットがプレスしたまま埃をかぶって並んでいます。この中で一番新しいダンロップマックスプライは、私が英国から帰る時にピカデリーサーカス・角のリリーホワイトで購入してきたものですが、もう二度とコートに出る機会はないでしょう。残照・余光の少しでも長からんことを願いつつも、ＣＦＲＰ製のラケットを手にしてクラブに通う今日此頃です。連盟の益々の発展を祈りつつ、擱筆いたします。

メモリアルデー

副会長（S.50～）
石　井　康　雄
（コニカ日野）

皆さんと共に30周年を迎えることでき、誠に喜びに絶えません。これも、先達の残された確たるビジョンを我々が確実に継承している証しであり、更に継続することが責務ではないかと思われます。

多摩社会人庭球連盟の歴史を辿ると、必ず４チームでの発足が語り草となっている。しかしながら、発祥を知るものは、ほんの一握りの人となってしまった、30周年を記念して、この記念すべき一日をリポートしてみたい、そして、温故知新。さらなる連盟発展の精神的な礎としてもらえれば幸いである。

昭和40年５月16日（日）は、曇り日であまりよい天気ではなかった。会場は、小西六日野コート（現コニカ日野）で改装前のクレーコート３面で開催された。
ホストの我が小西六チームは開催に先立ち、石灰を水で溶き、タコ糸を張り、コートのラインを引き、砂を撒き、ローラーをかけ、心もち入念なコート整備を終えウエルカム状態で居た。

やがて、伝説の４チームが登場して記念すべき第１回大会の幕が開かれた。
集まった精鋭を紹介すると、前田初代会長率いる多摩平クラブ、藤田初代副会長率いる鉄道技研、岸田初代事務局長率いる小西六、そして日立中研の４チームである。この中には鳴海創立功労者、下村現会長・桑原・牛山・神保の３元副会長、が居られ、幸にも私も選手として参加してたのである。競技に先立ち前田初代会長の挨拶は、“多摩地区には社会人がテニスをする場がない、テニスが好きな連中で多摩地区のテニスを盛んにしょうではないか…”と共に連盟づくりを呼び掛けるものであったと記憶している。

選手諸君の出で立ちも紹介しておきたい。当時は、白色を基調としたポロシャツ、長ズボン、ハンチング、Ｖラインセーターに薄底のテニスシューズを着用、手に持つはレギュラーサイズのウッドラケットでシープを張り井のプレスを携えている者が最高なお洒落であった。残念ながら参加選手の中には誰も該当者は居なかったようである。しかし、技術、スタイルはともかくとして、テニスに掛ける意気込みは、全参加者に漲り公式の競技が出来ることの喜びがコートに飛び交って居たように感じられた。

試合は、５ダブルス対抗戦でシングルはまだ無かった、そして、技術的にはローズウォール全盛時代の影響かストローク主体のゲームが多く、サーブ＆ボレーはまだ冒険心を必要とする高等技術であり敬遠されていたようであった。

試合の内容は覚えてないが、バックのパッシング、アングル・ボレー、ジャンピング・スマッシュｅｔｃが決まると感嘆の声があがる程度のレベルで試合を行い、結果は優勝・鉄道技研、準優勝・小西六、第３位・日立中研、第４位・多摩平クラブの成績を得て競技を終了。アフターの親睦会に移り、ビールで乾杯し多摩社会人連盟の記念すべき第一歩を印した楽しい一日は終ったのである。

今翻って考えると、多摩地区で社会人テニスが普及し、技術も向上し、競技環境も整備されて発足時の理想を遙かに超えるものがある。しかし、これからはボランタリーイズムでの運営の限界、ビッグ大会実施コート確保の問題、高齢化社会を迎える時の問題、等々避けて通れない問題に直面する。なんとか会員の皆さんの知恵と熱意で問題を乗り越えさらなる発展を望まぬには居られない。
そして、願わくば、多摩地区のあらゆる社会人テニス団体が大同団結し、社会的な認知を得られるようになることが多摩社会人連盟のあるべき姿ではないかとぼんやりと考えを巡らしている。

テニスの切手

副会長（S.60～）
渡　嶋　八洲夫
（I.H.I　田無）

昭和初期、父が佛国に留学中、出した手紙や、買いもとめた切手が家にあった事及当時の少年の多くが、ハシカの様に一度は切手蒐集熱にとりつかれた例にもれず、小学校５年の頃から、私も切手集めを始めた。

毎年おびただしい数の切手が、世界各国で発行されているが、その全部を買うわけにもいかず、日本の記念切手の外は、テーマを決めて集めている。地図、旗、鉱物、もちろんテニスも入っている。40年もテニスをやっており、テニスの切手には力が入るが、休日は、ゴルフ、テニスでとられてしまい、切手までなかなか手がまわらない昨今であるが。集めたテニスの切手の一部を並べて写真をとってみた。

写真中央３枚は、ハンガリーで、1964年に発行された、９枚シリーズのうちの３枚である。このシリーズは、13世紀から20世紀までのテニス風景をえがいている。左右２枚は、16世紀と18世紀のテニス風景で、中央は20世紀のものである。色々なテニスの切手をながめていると、素人がえがいたのか、こんなフォームでは、良い球は打てないと気になるものもある。仲々良いフォームのものももちろん多い。

連盟初期の頃、仲間に入れていただき、多くの人々と出会い、多くの友人を得た事は、この上ない貴重な宝であり、連盟の発展と共にあゆんでこられた事に感謝している。

大会運営について思うこと

副会長（H.6～）
岡　本　公　夫
（鹿島技研）

多摩社会人庭球連盟は、発足以来30年を迎え、加入団体数も120団体、男子団体戦は60回にも及び、12部183チームが参加するようになってきた。参加登録人数も5000人に達している。一方、ＯＬリーグも24チームが参加し、年々レベルが向上している。

当連盟は、三多摩地区に在住在勤の社会人の親睦を図る事が第一の目的であり、試合毎に対戦相手が異なるように工夫している。参加チームがこれ程多くなると、いろいろなチームが参加されると思われるが、連盟の主旨を遵守することを第一として、気持ち良く試合ができるようにお願いしたい。規則、日程の遵守、相手チームへの思いやりが必要であろう。

私も理事に就任し大会の運営をお手伝いするようになって、これだけ多くのチームをまとめていく苦労がやっと分かったような気がする。副理事長の時、会計を担当したが、連盟費、参加費の納入が遅いチームが見られ、毎年同じ団体の名前をみることが多い。また団体戦の運営を行っていると、対戦相手との日程の調整、コートの手配で問題を生ずることが多い。テニスがスポーツである以上勝つことが必要であるが、あくまでスポーツマンシップにのっとり、セルフジャッジで解決して頂くことが理事の負担を軽くして戴けるものと思われる。これについては各チームの事情があると思われるが、サッカーで採用されているイエローカード制導入の検討が必要かも知れない。

当連盟の30周年に当たり、皆様方には今後ますます会員相互の親睦を深めることが出来るよう一層の御協力をお願いしたい。

ゴールドメダル

理事長（S.59～）
吉　村　　正
（日野オフセット）

オーストラリアのブリスベンの街は、丁度日本の春の気候で、東京との時差も一時間、テニスをするのにはもってこい。さすがコアラの国だけあって、ユウカリの木が多く、その葉は油分がおおく、乾燥期の今は、あちこちで山火事が発生、まるで嵐のような熱風が町全体を覆いびっくりしました。

平成６年９月24日から10月２日迄の９日間この地で、「ベテランのオリンピック」といわれる世界マスターズ競技大会が開催されました。この大会は、1985年に第一回がカナダで、第二回が1989年デンマークで、今度が第三回と４年ごとに開催され、スポーツの国際交流を深めております。

今回は30競技種目が競われ、テニスについては、日本から総勢35名が参加、奮闘の結果金メダル３、銀メダル２、銅メダル１、４位２と輝かしい成績をおさめることが出来ました。

私も今回選ばれて、元デ杯選手石黒　修プロと共に行動することが出来、待望のゴールド・メダルを手にすることが出来ました。毎日の厳しい試合はまさしく国際試合そのもので、初めはどうなることやらと不安で一杯でしたが、一緒に行ったメンバーとパートナーに恵まれ、一生忘れることの出来ない想い出をつくることが出来ました。

さらに、オーストラリアの元デ杯選手セッジマンのいとこにあたる方のご自宅に招待され、テニスや食事を共にして、素晴らしいテニス・ツアーのひとときを過ごさせて戴きました。

陽気で、人情味溢れるオージー達との別れは、私共夫婦二人が、思わず涙にむせびました。

30周年を迎えた多摩社会人庭球連盟の会員の方々も、機を摑んで、国外にも目を向けながらテニスライフをエンジョイされるようおすすめします。

なお、今回日本から参加された方の中には、男子は、石黒プロの外、立石俊一、川端正志、高橋龍夫、徳弘晴輝ら現在ベテラン・オールジャパンプレーヤーとして活躍されている方々をはじめ、私のチーム・メイトである野口英世、石田　功、中村光男の皆さん、女子は、神保美智子さん（本連盟神保名誉会員夫人）、金子千春、松島喜久子、豊島貞子、辻　由美子、進士民子の皆さんら、多摩地区に関係のある方々がおられました。

私とテニス

総括担当副理事長（S.61～）
門　倉　貞　夫
（帝人中研）

良き先輩、同僚、後輩に恵まれて過してきた50有余年の人生ではテニスとの付き合いが最も長い。体質改善の目的と下宿生活でのゆとりから大学時代はテニス部で２年ちょっとの期間であったがしっかり鍛えてもらった。水、土曜日の午後の練習では、コート整備の前には５～６kmのランニング、先輩の練習でのボール拾いだけを入部からしばらくは徹底してやらされた。最初に先輩が面倒みてくれたのは振り回し。この練習では心臓が破れる程の苦しみを味わった。“百見は一行にしかず”は、テニスから教えてもらった一例である。入社３年目、三原市の工場に転勤になったのをきっかけにテニスにも精を出したお陰で、どんなに仕事が忙しくても体を壊さない自信がついた。運動不足の解消と体力維持のチェックを兼ねて真夏の中国選手権大会にエントリーを欠かさなかった。脱水症状で意識もうろうとしながらもコートを走り回った後のビールの味、沸きあがる活力の自覚、20代の体験をなつかしく想いだす。不惑の年を過ぎてからテニスが巧く、強くなったような気がしている。“一球入魂”ではないが、基本に忠実に精神を集中して、体力の限界に絶えず挑戦するつもりでテニスコートに遊ぶように心がけ、又多くのテニスマンとの交遊をいつまでも楽しみたいものだ。最近では、賀状に年間でのテニス回数を記すようになった。多摩社会人庭球連盟の大会ではこの20年来、社会人として常識あるテニスマンとの交流を常に感じてきた。5000人もの会員相互のボランティアと会社やクラブによるコートの提供を通して、爽やかな汗を流すことのできる環境を創出してきた30年の歴史を大切にしたいと思う。連盟発足の初心を忘れることなく、会員相互の協力と協調を大切にする精神がある限り、連盟の伝統を育くむプロセスに微力ながら注力したい心境である。

連盟と共に24年

財務担当副理事長（S.H.3～）
中　込　好　雄
（立川　T.C）

30周年おめでとうございます。
30年と一言で言いますが、思い起こせばいろいろな事を経験した一大変な年月だったなと思うと同時に、あっという間に過ぎてしまったなと、複雑な心境です。
私は昭和45年に、鉄道学園から加入させて頂き、早いもので24年になります。
その頃は、たしか５・６部ありまして、チャレンジラウンド方式で試合をしていたと思います。
毎年、春、秋と勝ち上がるのが楽しみで、１部を目標に週末は朝から晩まで、チームの皆なで、懸命に練習をしたものです。
その甲斐があって、１部で何回か優勝する事が出来ました。
その後、国鉄からＪＲへと改革し、鉄道学園が廃校になりまして、退部致しました。
今は、立川テニスクラブから１部で参加させて頂いております。
鉄道学園時代に、当時、副会長の牛山さんから、連盟の仕事をしてみないかと勧められました。その頃、私は自分のテニスに夢中でしたので、その時間が少なくなるのではと、一抹の不安を感じながら引き受けたのを、覚えていますが、諸先輩の御指導のもとに、連盟の仕事をするうちに、自分だけのテニスから、皆さんと共に向上し、そして楽しめるテニスへと、テニスの幅が広がって行くのがわかるような気がします。
今では、勧めて下さった諸先輩に、感謝しています。
連盟も現在、120団体、5000人という大組織で、ますます発展しつつあります。これからも、多摩地区のテニス愛好家の皆さんの、交互の親睦と、向上に、微力ながらお手伝い出来れば幸いに思います。

15年目の想い

登録担当副理事長（H.5～）
市　来　惟　明
（府中　T.C.）

私たちは昭和55年春、第31回大会から参加させて頂きました。当時既に４部66チームの加盟があり、新米同志のユネスコ村チームと優勝を争ったことを思い出します。チーム結成10年目の若かりし面々を懐かしく想起します。あれから15年、12部180チームと、会員は３倍になっています。しかし規模だけではなく、きっと中身も大きく変わって居ることでしょう。因みに、記録を調べたところ、当時出場した私たちメンバーの内、現在も活躍しているのは２名だけとなって居ます。

夢中で過ぎ去った15年を振り返り、タマシャカの魅力は何かと自問する時、その対戦システムにあると気付きます。10～13名と言うほどよい？選手構成、ほどよい単複比率、部優勝まで４戦と言うほどよい対戦数、加えてこれが極め付きの「偶数試合」。むしろ非常識とも思われるこの「偶数試合」こそが、部制で力を揃えられるうえに、全試合を最後まで気のを抜けない面白い（辛い？）ものにしている元と思われます。また試合の度に概ねお互いの活動の根拠地を訪問することになる「相互コート提供システム」も、一見面倒なようでいて、実は試合日を楽しくする要素になっていると思います。

30周年を迎えた今、此のテニスを常に面白くするシステムと、５千人の仲間を常に身辺に持つ我々は、誠に幸運であると認識し、これは「多摩テニス人の宝物」であると気付くべきです。

私は、この様な宝物を創り育ててくれた先輩諸氏に感謝します。同時にこの組織の一層の発展に少しでも寄与できるよう、ある時期自分なりの役割を担って、次の世代へ宝物を継承して行くお手伝いが出来ればと考えて居ります。30年と言えばワンジェネレーション、丁度中程から参加した私は、次代への橋渡しの役が果たせればと思っています。

ユニークな団体戦と不文律

理事（S.61～）
沖　津　博　義
（百草ＴＧ）

今年三月の総会で「多摩社会人の団体戦は、なぜ試合数が偶数なのか？奇数には出来ないのか？」との質問がありました。

その時、下村会長は「奇数方式の試合方法を希望するチームが、大多数なら奇数方式に移行しましょう」と応えられたように記憶してます。

しかし私は、現在の団体戦の試合方法が、どこにもない非常にユニークなやり方だと思っております。

偶数方式になった歴史的経過は知りませんが、国内で行われている団体戦で偶数方式を採用している唯一の組織が、多摩社会人庭球連盟ではないでしょうか？

まず第１に、その唯一の組織と言うところに、「偶数方式の試合方法で行っている組織が一つ位あっても良いじゃないか」と言う奇妙な優越感を覚えます。

二つ目は、現在試合を行っている多数のチームが経験した事と思いますが、４勝４敗になり、最終的には、セット数、さらにゲーム数まで計算した経験がおありでしょう。

その様な試合を何度か経験してくると、初めの試合（シングルス及びダブルスのナンバー５、ナンバー４）に出場する選手は、ただ単に「試合に勝てばよい」そんな気持で試合にのぞむのではなく、勝てる試合は常に最大得点差（例へば、６－０、６－０のストレート）で、対戦相手が、とても上手で勝目がない場合には、ワンポイントでも多く取っておかないと最後迄勝敗の行方が解らない。

その気持、つまり勝てる試合は、常に最大得点差で勝つと言う気持が、知らず知らずテニス技量を向上させ、手抜きしないテニス、勝つテニスが身について行くのではないかと思われます。

一部の方は、現在の偶数方式に反対かも知れませんが、私はこの「ユニークな団体戦よ、永遠なれ」と大声で叫びたい。

我が百草テニスガーデンが、多摩社会人庭球連盟に初めて参加したのは、昭和56年春の大会からでした。その時以来痛切に感じるのは、下村会長が常日ごろ言われている「社会人としての紳士協定」によるオーダーの組み方を守っていただきたいと思います。この不文律を守らないと対戦相手として感情を害するだけでなく、試合進行の上でも遅滞の原因になります。

紳士協定にのっとり、トラブルのない、一人でも多くのテニス仲間ができる、そんな「多摩社会人」であって欲しいと思います。

多摩社会人庭球連盟に寄せて

理事（S.59～）
碇　本　鎌　一
（小金井市民ク）

多摩社会人庭球連盟の30周年を迎え、ご同慶の至りに存じます。

思えば多摩地域は東京のベッドタウンとして独自の文化と伝統を育む素晴らしい地域に変遷してきていますが、テニスを通して多摩社会人庭球連盟はこの文化形成の一翼を担ってきた言っても過言ではないと思います。

大会には職場チーム、市民チーム等々、様々なチームが参加し、その規模も大きく発展してきています。自画自賛になりますがその発展ぶりには目をみはるものがありますし、また、30年の歴史の重みをつくづく感じさせられます。ここで忘れてならないことは、大会の運営に当たられている役員や選手の方々がテニスをこよなく愛すとともに手弁当で参加されていることです。これらの多くの皆様がこの輝かしい歴史を築き上げられたものと存じます。

私どものチームも、まもなく20周年を迎えることとなり、時の流れの速さを感じます。

私どもは市民チームとしてA,Bの２チームを編成し、大会に参加しています。選手の年齢構成が高い悩みはありますが、６年度はAが２部、Bが３部であり、年齢の割りには健闘していると自負しています。

大会に参加したある時のことですが、相手チームのあけぼのパンさんから、試合中に焼き立てのパンを沢山差し入れて頂きました。美味しくいただき感謝するとともに、地域に根ずいた大会であることをつくづく感じさせられました。（試合は、当然？のことながら当方の負けでした。）

多摩社会人庭球連盟は30周年を踏み台ととし、一層の地域交流を図るとともにテニス愛好者の技術向上に貢献すべく努めて行くことが最大の目的と考えています。

今後とも会員皆様のご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げ、拙筆ですが30周年を記念して、多摩社会人庭球連盟に寄せることばとさせて頂きます。

多摩社会人庭球連盟に寄せて

理事（S.58～）
鈴　木　晃　郎
（日野自工）

私が小学校に入学した頃に多摩社会人庭球連盟が発足し一メンバーとして一役員としてこの筆をとることができて嬉しく思います。

私がテニスを始めたのは、16才の時で友達に誘われて木のラケットと白いボール（昔は白かった）を打ち込んだことを今でも忘れられません。

毎日毎日　練習に、試合に明け暮れ　数多くのテニス仲間と知り合い有意義な青春時代を過ごすことができました。これもテニスの”おかげ”

日野自工に入社しても　大好きなテニスを続け諸先輩の指導の基　社会人らしくなったかなと思った頃　多摩社会人庭球連盟の理事に推薦され　現在に至っています。

テニスを通して　多くのプレーヤーと知り合い、多くのプレーヤーと試合を行い、多くのプレーヤーにテニスの楽しさ・厳しさを知ってもらうことが私自信の楽しみであり成長の場であると思っています。

６年前に先輩理事に進められ取得したテニス指導員は、現在では国家資格として誇れるものとなり責任を大いに感じています。

これらかもテニスを愛する一人として、多摩社会人庭球連盟の発展の為に努力しますので宜しくお願いいたします。

最後に30周年を支えてくれた多くの諸先輩と会員各位の健勝をお祈り致します。

4対4のすばらしさ

理事（S.58～）
吉　本　静　三
（ユニスコ村）

私は今から15年前の1980年に初めて多摩社会人のチームの一員として加盟しました。学生時代にテニスをやっていたのでなく、社会人になってから、家庭も顧みず、毎日曜日はテニスに明け暮れていました。したがってテニスにおける団体戦のすばらしさは回数を重ねるごとに魅力になってきました。

特に、多摩社会人の団体戦で4対4の時のセット、ゲーム数の大事さ、チームの盛り上がりなど、個人戦で味わえない楽しさがあり、各個人の技術の向上にも多いに役だっています。チーム内は個人戦の大会では何時もライバルであり多摩社会人では、チームメートです。この4対4のすばらしい大会を何時までも続けられるよう、また自分の目標として全日本ベテラン大会に常時出場出来るように、微力ながら頑張ります。

多摩社会人の今後を考える

理事（S.59～）
丸　山　　寛
（日野オフセット）

私が、多摩社会人庭球連盟を知ったのは、昭和48年で、理事として、運営のお手伝いをするようになったのが、昭和59年からです。昭和48年当時は、団体戦も3部迄しかなく、1部では、チャンピオンチームに対してチャレンジラウンド制を取っていたように記憶しています。現在は、12部180チームと大所帯になったものです。この間、テニス界も大きく変わり、審判の方法も敗者審判からセルフジャッジへ、ラケットは、素材がウッドからグラファイトへ、大きさは、レギュラーからラージへと変わっていきました。しかし、当連盟の運営方法は、10年前とさほど変わっていません。大会運営は、パソコンのお陰で、少しは楽になったものの、大半は人力に頼っている面が多く、手書き文書がワープロに変わった程度のものです。現在の当連盟の事業は、春、秋の団体戦と、夏の個人戦の3つの事業だけですが、これに30人近い理事が悪戦苦闘しているのです。本来ならば、この3つの事業以外にテニスに関する情報なども周知を図るべきなのでしょうが、現段階では到底できません。理想が高いと言われるかも知れませんが、多摩社会人庭球連盟の会員は、ルールに関しても、マナーに関しても、テニスに関することは全て、常に最先端にいてもらいたいと思っています。又そのお手伝いを我々理事ができれば最高と考えています。この記念誌が出来上がるころには、30周年事業としてルール、指導者の講習会が行われます。

この様な事業を、周年事業としてではなく、毎年の事業として行っていければと思いますが……。

30周年を迎えて、もう一度連盟の役割を考えて、次の時代へ繋げたいと思っています。

多摩社会人庭球連盟30周年にあたり

監事（S.60～）
大　平　　眞
（富士電機）

多摩社会人庭球連盟の30周年にあたり、一言述べさせていただきたいと思います。連盟の発足当時は、4団体、100人足らずの愛好者からのスタートと聞いております。

その当時は私共のチーム（富士電機）も加盟したいと思っていましたが、人数、レベル等で、こちらがしり込していたと思います。

そのうちに部員が3人はいり5人はいりテニスの好きな仲間がどんどん増えて行き、少しでもいいボールを打ちたいとレベルアップの話が出て来て、合宿時にメーカの指導者を数年にわたりお願いをしたり、多摩社会人の役員の方の指導を仰ぎました。お蔭様で市民大会、Bクラスでよい成績が少しづつ残せるようになりAクラスへ選手を出せるようになり、選手の数も増え連盟へ入会させていただきました。25団体、1400人の頃だと思います。

その後は連盟の方々との交流も増え、テニスを楽しむためのルール、マナー面でも大いに勉強させていただき私共のチームの底辺も拡大され、今日があるのもその頃の指導のお蔭と感謝しています。連盟

は20年経過時84団体3000人が本年30年は120団体5000人とテニスを楽しもうとしているチームが着実に増えています。微力ではありますが、一役員としてテニス愛好者のために、連盟が今後共継続して行けるよう努力したい。

連盟とともに

監事（S.60～）
木村　貢
（新都市建設）

昭和40年に4団体で発足した多摩社会人庭球連盟が、30年間毎年参加団体の加入増加が続き、平成6年には120団体と目をみはるような発展を遂げてきました。実施規則によると「素晴しいテニスの試合が出来る環境づくり」とあるように連盟の基本姿勢がここにあることによる賛同が得られていると思われます。

私の所属している新都市建設公社テニス部も連盟に加入して20年になりますが、連盟に入ったことがテニス部の活動に大きな影響を与えてくれました。それは、テニス部及び部員に目標設定ができたことです。加入前は、ただ漫然と仲間で練習をしていたのが春、秋の団体戦に向けてということになると練習も漫然から真剣にという態度に豹変いたしました。このことで喜ばしかったのは、テニス部という組織としてのまとまりが出来たことです。これは、連盟に参加させていただいた成果であると感謝しております。

成果にはおまけが付きまして、各自、部が一丸となって目標に向ったことでチーム力もアップするもので、加入10年目にして第41回団体戦で1部優勝を果しました。それにテニスの経験のない素人仲間で始めたテニス部が、連盟に参加して活発に活動始めると入部希望者が増えはじめ20名から50名へと大世帯になり団体戦へ3チームをエントリーするまでに成長いたしました。

今後連盟としては、組織の法人化、多摩にある他の団体との合併問題等課題はありますが、会長を中心に役員、加盟団体全員で現在の健全な組織を推進することが連盟の発展につながるものと確信いたします。

多摩社会人の方々との出会い

理事（S.61～）
高久　務
（東芝日野）

ある日、会社の友人からテニスの合宿にさそわれ暇だったのでついて行った。

ほとんどはじめてのど素人。ボールを追い続けているうちに一日が終り手はまめだらけ。次の日は何とかなりそうな気配も出てきて、さあがんばるぞとバタンキュー。

目がさめて2日目の朝、幹事の人から「ゴメン。コートとれていなかった。」これがテニスとの出会い。

ようやくストロークが続けられる様になった頃チームメンバーも集まり多摩社会人庭球連盟に加盟させていただき団体戦へ出場。

対戦相手が皆うまく見え、なかなか勝てない。

その頃は、コナーズ、ボルグ、エバートの全盛期。テニス人口の爆発的増加とゴールデンタイムのテニス放映。チームのメンバーも続々と増え、又連盟の団体戦も毎季クラスが増え続け、我々チームも激しく上降下。

ようやく団体戦でたまに勝てる様になった頃現会長、理事長から声をかけていただく様になった。

又、連盟の企業やクラブチームの人達とも知り合い競い合いしているうちに20周年の記念式典が立川で開催と思ったらもう30周年。

短かくもあり長くもあるテニスとのつきあい。

去っていった人、新しくきた人、役員の方々をはじめ多くの人々のささえで連盟が発展してきたことと思う。

大会で回りを見ればカラフルな若人が毎年増加。この人々の力も得て今後も連盟がますます発展されることを期待します。

多摩社会人庭球連盟創立30周年に寄せて

理事（S.61～）
平　岡　克　英
（船舶技研）

多摩社会人庭球連盟が設立30周年になり、人間流に言えば而立の年です。私と連盟の関わりは春秋の団体戦に出場し始めてから約15年ほどになり、本連盟の人生の半分とおつきあいをしていることになります。また、理事としてお手伝いをはじめて８年になります。この間は連盟としても成長期に当たり充実した時期であったと思います。おかげでさまざまな楽しい経験をさせていただきました。以下にその一端を記して感謝いたします。

団体戦参加当初は職域チームとの対戦が多く各企業のコートに出張するのも試合の勝ち負けとは別の楽しさがありました。他人の職場というちょっと企業秘密めいた場所に特別の用事もなく、またコネもなく入れるのです。興味津々、物見遊山気分の遠征でした。

近年はクラブチームの連盟参加が増えました。これらのチームには若い人がおおく新鮮なテニスが味わえます。特に秋の大会の決勝は昭和の森コートに一同が会して実施されます。これがまた楽しいのです。下位の部でも１部顔負けの熱戦が観戦できるのです。決勝に進出できなかったみなさんにも一度のぞかれることをお勧めします。

裏方としては昨年来登録選手名簿のＯＡ化をお手伝いしています。登録者の約１／３、1500名以上の入力をしたと思います。珍しい名前の読み方を覚える、パソコンソフトのロータス１－２－３の入力に習熟する、ある会社の組織がおおよそ覗けるなどの楽しみがありました。また、３チームの連盟加入の手助けをする機会にも恵まれました。これらのチームが今回も昇格したよとうれしい報告をきかせてくれます。

連盟の団体戦には定年を迎え所属の職域チームを離れるまではずっと出ていたいと思っています。その時、連盟はどんな姿をしているでしょうか。連盟の今後が楽しみです。

テニスがうまくなる秘訣

理事（S.61～）
前　川　悦　一
（コニカ八王子）

テニスを初めて20年程になり、すっかりテニスが生活の一部となっています。今でもテニスがうまくなりたいと思っています。

どうすればうまくなるのか？
それには２つの道があると思います。

１つは、トーナメントプレーヤとして厳しい練習をし、試合に挑戦してゆく道です。しかし凡人はどんなに努力しても頂点に立つことは出来ず、途中で挫折してしまうでしょう。技術レベルは向上しても、テニス寿命は短くほんとうのテニスの楽しみを知ることもなく燃えつきてしまうのではないでしょうか。

もう１つは自分に合ったテニス環境を見つけることです。テニス環境とは、テニスレベルが近い気の合った仲間と、手頃な時間とお金でいつでもプレーできるクラブのことです。アマチュアプレーヤーはこのクラブで、レベルの近い人達とプレーし、テニスを心ゆくまで楽しみ、又それを酒の肴にするのもいいでしょう。一つのゲームに一喜一憂することで成長の度合は小さいかもしれないが確実にレベル向上します。そればかりではなく精神的肉体的に健康な体を得て、人との出会いがあるのは、この上ない副産物といえます。さらに自分のテニスレベルが向上すれば、この環境は少しづつ変わり、この変化に合わせてさらにレベルは向上し、多くの仲間が生まれることでしょう。「情熱を持ち続けること」これが一番うまくなる秘訣だと思います。

多摩社会人が30年もの長い歴史を積み重ねているのも、しっかりしたテニス環境を作りあげているからです。テニスを生涯の友として仲間が、互いのレベル向上だけでなく、多くの人のレベルに合った環境作りをしているからだと思います。私自信これからもさらにレベル向上の為に、多摩社会人のテニス環境作りに、積極的に取り組んで行きたいと思います。

理事とてしメンバーとして　２つの顔

理事（H.63～）
伊　藤　眞理子
（通信総研）

私はＣＲＬのメンバーというより、ＯＬリーグのメンバーとしてほとんど過してきました。

振り返りますと、10年以上前、今は副会長を退かれた柴田さん（元電波研職員）が、女性だけで対外的に行なう試合がないのでと御膳立てしてくださったのがきっかけでした。同じような環境にあった船舶技研の女性との親善試合を契機に、回数を重ねＯＬリーグとして組織できる感触を得、発足したのが昭和59年春でした。

第１回大会は６事業所８チーム。当時日立中研はＡＢＣ３チーム編成をしていました。これは今日現在までも事業所としては最高の数であります。

私は昭和62年の第７回大会からＯＬリーグ理事を引き受けました。この頃になりますと20チーム以上が組織され、試合で不都合があったことを電話やファックスでたくさんいただきその度に頭を悩ませたものでした。

ＯＬリーグ規程も何回か修正をしてまいりました。現規程は、いままでの歴史を踏まえてでき上がったものです。

キャプテン会議の時は理事としての顔、ＯＬリーグの試合のときはＣＲＬの一員としての顔で何とか頑張ってまいりました。

２年前からは大会を担当して下さる方が毎年２名ずつ出て応援して下さることとなり、何とか持ちこたえている状態です。

いつまでできるかわかりませんが、意見は何でもけっこうですからどんどん寄せて下さい。そしてわからないことは相談して、お互い１人では悩むことのないようこれからも仲良くやっていけることを望んでいます。

和

理事（S.63～）
武　藤　　功
（立川　T.C.）

多摩社会人庭球連盟が30周年を迎えることができて、大変嬉しく思います。昭和40年の春に第１回多摩社会人庭球大会が開催されました。その年に、私は中学校で軟式テニス部に入って初めてラケットを握り、素振りと球拾いの毎日から始まりました。中学時代が土台になってそれから15年軟式テニスを続ける事ができました。

軟式テニスを経験していたことで今の立川テニス倶楽部で仕事をするようになり、硬式に移って15年になります。わたしのテニス年齢が30才となり、多摩社会人庭球連盟と同い年です。これからも連盟の発展と共にテニスを続けていきたいと思います。

当倶楽部は昭和50年に加盟をしていましたが、団体戦には昭和55年秋季大会から参加し始めて、平成３年からはＡ，Ｂ，２チームが参加するまでになりました。

倶楽部コート入口には大きな石碑があります、そこに刻まれている文字は『和』の一文字です。団体戦を戦うためにはこの『和』が一番大切なものではないでしょうか。

この和をもって応援して、勝利したときは皆で喜び、敗れたときは皆で慰めあうことができるのが団体戦の良いところです。これを大切に立川テニス倶楽部は続けていきます。多摩社会人庭球連盟も『和』をもって、永く活躍、発展されることと思います。

ダブルス選手権担当を経験して

理事（S.63～）
桜　井　吉　雄
（IHI）

渡嶋副会長のもと、私は平成六年度のダブルス選手権担当となった。4月頃からの実行ミーティングが開始された。主担当はコート確保で有る。

今年は加盟各団体から何面貸していただけるだろうか、参加者申込みと開催要項決定迄に仕事をしなればならない。前任担当理事に要領を聞き文書作成等の作業に入っていく、会社での仕事の後、パソコンを借用して作成して行く。何通答えがくるであろうか、期日を確認し、封筒に入れ切手を貼っていく。

そして期限迄に使用可の返事を数団体からいただいた。前年度よりも若干少なかったがこれで予選大会が開催出来る目度がたった。

特にダブルス選手権は各団体の夏休みと重なり、又、参加人数も多く、コートを提供していただく団体の方々、そしてコート管理部門殿の御協力無くしては、開催は不可能となってしまう。

第一日目予選大会日は雨、第2週目晴天に恵まれ無事終了する事ができた。この日私は、やっと主担当として責任が果たせた安ど感と、予選大会々場を御提供いただいた各団体の方々に感謝の気持ちでいっぱいだった事を覚えている。平成7年度予選大会々場については、議論されるべき事項であるが、時代の流れも有り、重い各団体への負担があってはいけないと考えている。

特に決勝当日、集合に遅れて来た選手の皆さん。予選大会から、全て手弁当という事を忘れないでいただきたい。貴殿方は、参加する事を当り前だと思っていますが、連盟役員以外にも、本大会開催に当った関係者全員の御協力が有ればこそ、決勝大会に参加出来たという事を忘れてもらいたくはない。

私流テニスよもやま話

理事（H.3～）
斎　藤　慈　子
（府中TC）

芸術の秋にふさわしく、陶芸の個展、絵画音楽等一気に観賞する機会に恵まれました。個展を開かれた方とお仲間らしき方との会話を、傍らで聞かせていただきました。「まずは技術の取得、最初の内は、何でも良いから何か一点、自分なりの自分らしさを表現できる努力を繰り返しする事、それがありふれたお茶碗でも納得のいく迄作る事、それが肝心、一段落越えそうになると壁にぶつかりもうやめたいと思う心の弱さとの葛藤に打ち勝って次の段階へ……と。そして気がつくと10年」と言っておられました。石の上にも3年。10年はやはり重いと思いました。

ふとテニスにおきかえその話を自分の中で反すうしてみました。たかがテニス、されどテニスで、ここまでやればこれでよいという終着駅がなく、なかなかに難しい競技ではありますが、これ程楽しい競技は他にないとも思います。そして嫌な事に、その人その人の性格まで見えてしまうやっかいなスポーツでもあります。あれやこれやで私ものめり込んで10年超えてきました。陶芸等の様に作品として残すことはできませんが、私なりの形が少し出来てきたかなと思います。1個のボールを通して様々な人間模様が描かれたりしながら豊かな人生経験を味わう事もできます。この多摩社会人庭球連盟も早や30年の歴史をもつという。私が関わり始めてまだ2－3年です。女性も大いに参加出来る団体として努力されているにもかかわらず参加者が少ない現状です。30年の歴史の重さ、培われてきた伝統を大切にしながら、よりよい多摩社会人の大会になってゆく様、テニス愛好家の一人として微力ながら協力してゆきたいと思っています。今後共よろしくお願い致します。

多摩社会人をふりかえって

理事（H.5～）
山　崎　美　弘
（立川G.T.C）

多摩社会人庭球連盟30周年、おめでとうございます。

立川グリーンテニスクラブが、多摩社会人庭球連盟の一員として参加させていただいてから、もう10年が過ぎようとしています。昭和60年に、８部からスタートし、当時は無我夢中でテニスをしていたような気がします。30年間の役員さんのご苦労は、いかばかりかとご推察申し上げます。現在12部にまでふくれあがった多摩社会人庭球連盟にとって、役員の役割は、さらに重要になってくるのではないでしょうか。当時から比べると出場メンバーも徐徐に新陳代謝をしながら、対戦相手のレベルがしだいにアップする中でそう簡単には勝てなくなってきているのが現状です。向い風はしだいに強くなり、あぶら汗とひや汗の連続です。親睦が多摩社会人庭球連盟の第１目的であるとすれば、試合をすれば、負けたくないというのも人情です。負けたくないから、努力もし、そのおかげで気力、体力が培われるといっても過言ではないと思います。社会人である以上、自分のおかれた環境の中でベストをつくす、それが社会人プレーヤーの宿命ではないでしょうか。どんな相手にも全力をつくすをモットーに、テニスを楽しむ余裕をもちながら努力していきたいと考えています。そして、これからの多摩社会人庭球連盟のますますの発展に少しでも協力できればと考えております。

テニススタイル

理事（H.5～）
山　口　恵　美
（日立中研）

「あなたにとってテニスとは何ですか。」と聞かれたとき、私は一体何と答えるのだろうかーー。」

テニスをしている時は無心になれる。それまでにどんな嫌な事があろうとも一度コートに入ってしまうとすべてを忘れ、心から楽しんでplayする自分へと変化していく。いわゆるストレス発散というものかもしれない。しかし、それだけではなく皆と同様に趣味の面も含まれ、友人とテニスをすることもしばしばある。勿論その時はいつになく笑顔の自分がいるようで、爽快感を満喫している。

テニスはそれだけではなく、精神的な戦い・playのかけ引きがある。相手の先をよみ自分なりのパターンを構成していく。それをいかに試合で生かせるかは日頃の練習によるのだろうが……。私はこういうテニスはあまり好まない。内面的にまだまだ弱い部分が多いという理由もあるからか、やはり前述したような無心で楽しめるテニスが好きである。

一般的にピリピリした大会が多い中、多摩社会人ＯＬリーグはアットホームで楽しみながら試合を行なえる場である。つまり、私の好きなテニススタイルに似ている。入社してまだ３年と浅いので、これから先ＯＬリーグの良さをもっと深く知っていくことであろう。

「あなたにとってテニスとは何ですか。」と聞かれたら、私は自分自身を強く育て心から楽しめるスポーツーーーある意味ではストレス発散ーーーと答えるだろう。また、私にとって一生続けていきたいスポーツと胸をはって答えたい。

多摩社会人庭球連盟が今年30周年を向かえることは、大変喜ばしい事実だと思う。これから先も誰もが楽しめる試合スタイルを維持し、多くの人が気軽に参加できる大会であることを祈願したい。

コミュニケーションの充実に向けて

理事（H.6～）
三　村　　到
（日立中研）

多摩社会人庭球連盟結成30周年おめでとうございます。連盟の発展はひとえに先輩の皆様のご尽力の賜と考えます。現在、連盟運営に参加させて頂いている者として、この歴史を継承し、さらに発展させていく責任の重さをひしひしと感じております。

今後、本連盟をさらに実りの多い活動の場とするには、様々な施策が必要になると思います。その一つとしてコミュニケーションの充実を図ることがあると思います。春秋の団体戦、ダブルス大会などの結果や、連盟運営に関する話題や議論をタイムリーに広報することが是非とも必要でしょう。広報誌でも良いでしょうし、ファックスレターといった手法も考えられます。メディアの有効活用を考えても良い時期にさしかかっている気がしてなりません。前記のような観点から、今後の連盟の活動に積極的に取り組んで参りますので皆様のご協力をお願い致します。また、色々なご意見をお寄せ頂ければと思っております。

最後になりますが、今後の加盟各団体の皆様の益々のご発展をお祈り致しております。

テニスを楽しむために

理事（H.6～）
木甲斐　節　生
（東芝府中）

すでに20年以上もラケットを振っている事になるが、どうしてこんなに長い間続けられたのだろうか。答えは、楽しいからである。何が楽しいのか、最初は、ボールを打てるだけで楽しかった。（たとえどこに飛んでいこうと…。）次に、狙った所に行く様になり、ゲームをやれる様になる。この段階で、勝つ楽しみを覚えると深みにはまってしまい、抜け出せなくなってしまう。（実は、勝ちにげできればと思っているのだが、いつの間にか高い目標になってしまった。）

さて、人によってテニスの目的をどこに置くのかが大分異なっている様である。勝つ事、人との交流、飲み会、ベターハーフを見つける為、健康維持、老化防止、家庭からの逃避等々色々であるだろうが、楽しんでテニスをやって欲しいものである。その際、自分だけ楽しむのではなく、一緒にプレイしている人も楽しくやれる様に心がけて欲しい。それにはコート内外でのマナーを守る事が大事である。

多摩社会人庭球連盟も、会員数が増え運営が大変になってきており、今後改革が必要になると思われるが、運営の基本方針を実状に照らし合わせどう決定していくかが重要だと思う。企業チームとクラブチームが混在したり、８ポイントの試合形式だったり、オリジナルな運営システムは、なかなか楽しい仕組みだと思う。（不満がある人もいると思うが。）連盟は、何のために存在するのか？私は、テニスを楽しむ環境を提供するためだと思う。会員は、テニスをより楽しもうとして参加しているはずである。皆で、テニスを楽しめる様に、これからも頑張りましょう。

実力200％発揮

理事（S.58～）
萩　原　恒　夫
（帝人中研）

今から確か14年前に帝人中研テニス部のＢチームのマネージャーとして東芝府中に試合に行ったのが、私と多摩社会人庭球連盟の最初の関わりである。はじめての団体戦であり、かつマネージャーとしての大役をになっての遠征であった。東芝府中のテニスコートはラグビー場などを越えて奥まったところに位置していた。はじめての団体戦のためシングルスの応援で既に緊張と興奮が頂点に達していたのを今でもよく覚えている。初陣はダブルスの№５で出場した。テニスの恩師である帝人の藤田豊氏とのペアでださせていただいた。日頃の練習成果200％発揮（当時の同僚のコメント）出来、セットカウント２－１でとることができた。そしてチームも５－３で勝利を収めた。この時、テニスの別のおもしろさを知ったと記憶している。テニスは個人競技的色彩の強いスポーツであるが、団体戦でしか味わえないおもしろさが沢山あることが分かった。

多摩社会人庭球連盟との関わりで心に残るもう一つの出来事は、11.2年前の春の総会の時、私の質問に対して「一人でも多くの人にテニスを楽しんでもらうことを多摩社会人庭球連盟の理念としている」と答えた下村会長の言葉である。

「今日は楽しかった、いい汗をかき、いい人たちと知り合えた。このテニスの楽しさをより多くの人に伝えよう。」というふうに解釈している。

私の人生はテニスと切っても切れない紐で結びつけられてしまっている。家族全員でテニスを楽しんでいる。多摩社会人庭球連盟の節目に当たり、半分以上過ぎた私の人生とその伴侶であるテニスをもう一度省みることにしたい。

30周年に寄せて

理事（H.５～）
内　田　廣　一
（オーチャードＴＣ）

多摩社会人庭球連盟発足30周年おめでとうございます。

一口に30周年と言いましても、とても一口で言えるものではありません。その間、幾多の試練があり、それらを乗り切って、今日を迎えられたのだと、思っています。それも、これも、会員のみなさま、並びに、役員の方々の、並々ならぬ努力の賜物ではないでしょうか。

一般に、『会社や組織の寿命は30年。』などと言われていますが、こと我が連盟に関しては、老いてもなおさかん、ではなく、これから益々の、発展の途に邁進しているように思われます。

８歳から80歳まで楽しめる、素晴らしいスポーツ、テニスを、手軽に楽しもうではありませんか。そして、スポーツ紙、マスコミから忘れられそうになっているテニスを、ブームではなく、文化として、次世代へ伝えていこうではありませんか。

まだ、２年目の新米役員の私ですが、これからの会の発展のお役に、少しでも立てばと、思っています。

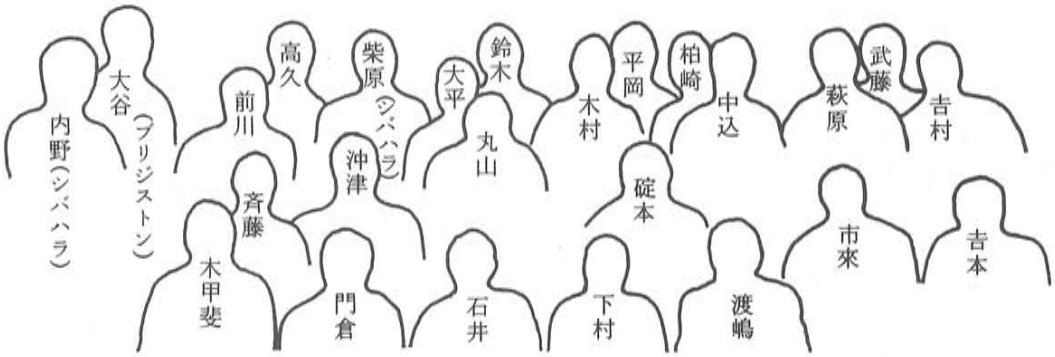
理事に選ばれて

理事（H.６～OL担当）
望　月　寛　子
（帝人中研）

思っても見なかった多摩社会人庭球連盟の理事に選ばれて、当惑と不安でいっぱいです。

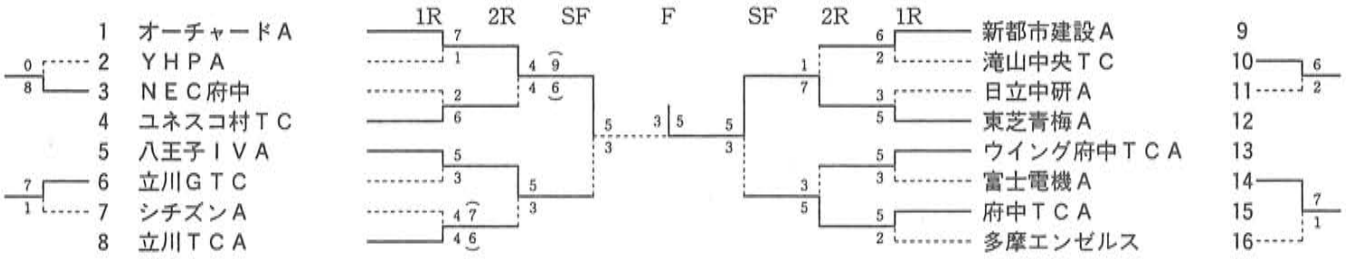
でも輝かしい伝統のあるこの組織の運営に少しでもお役に立てるなら喜んで与えられた責任を果たす覚悟でおります。どうか皆様のご支援、ご協力を心からお願いいたします。

名誉会員　　前田　正宣（S.40～44　会長　多摩平クラブ）
　　（故）藤田時次郎（S.40　副会長　鉄道総研）
　　（故）岸田　稔美（設立功労者　コニカ日野）
　　（故）鳴海　寛治（　全　上　　鉄道総研）
理　　事　　柏崎　進一（H.3～　緑ヶ丘T.C.）

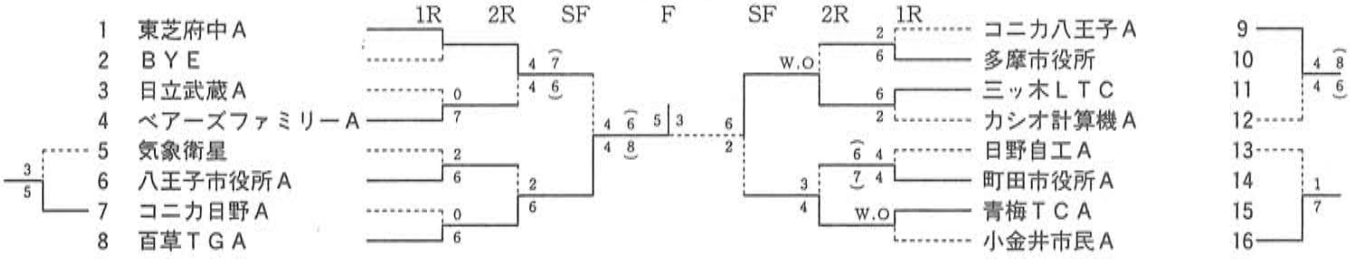


平成６年度　役員親睦会　　7. 1. 21

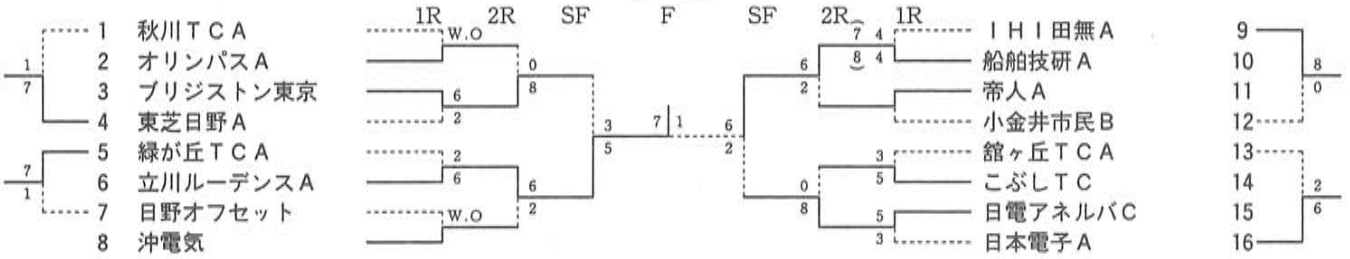
１　部



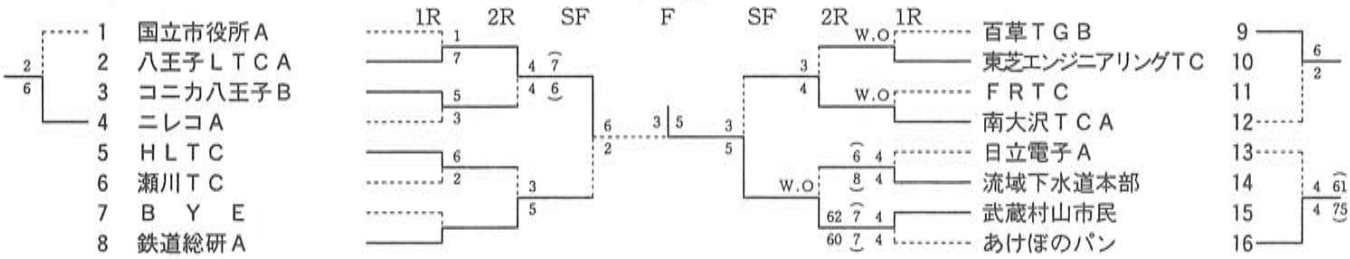
２　部



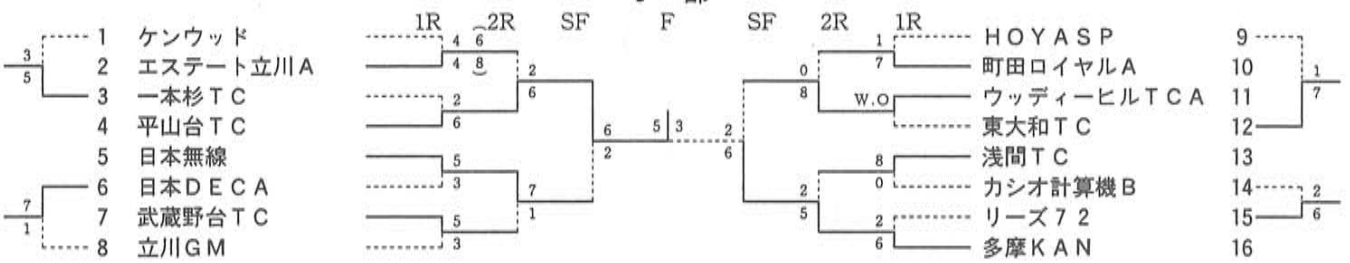
３　部



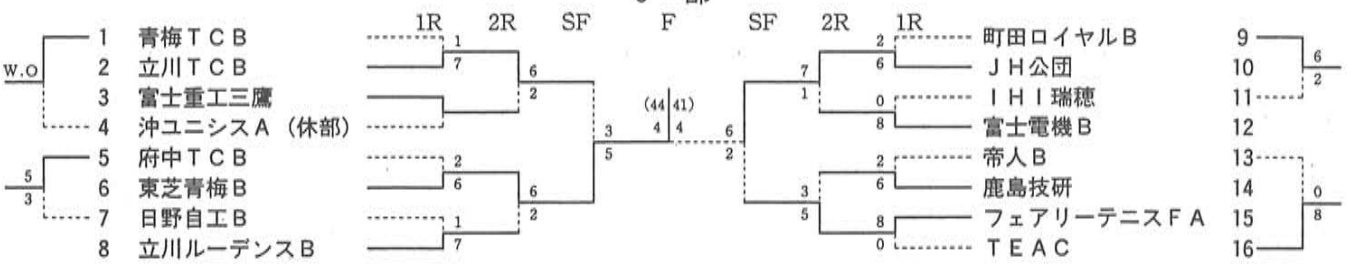
４　部



５　部

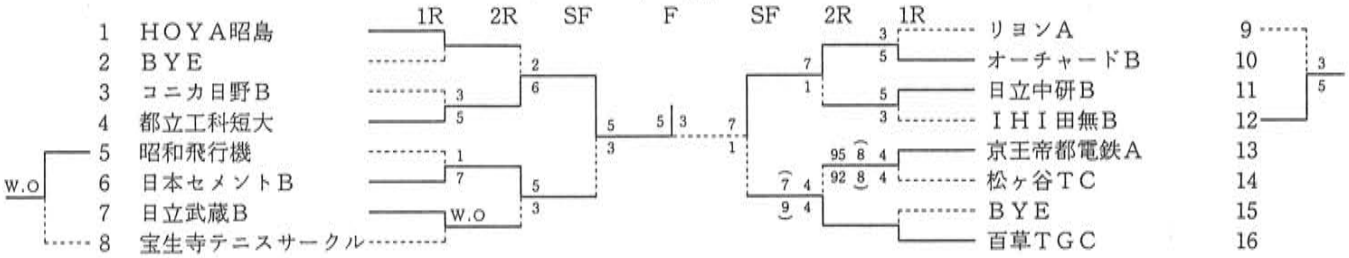


６　部

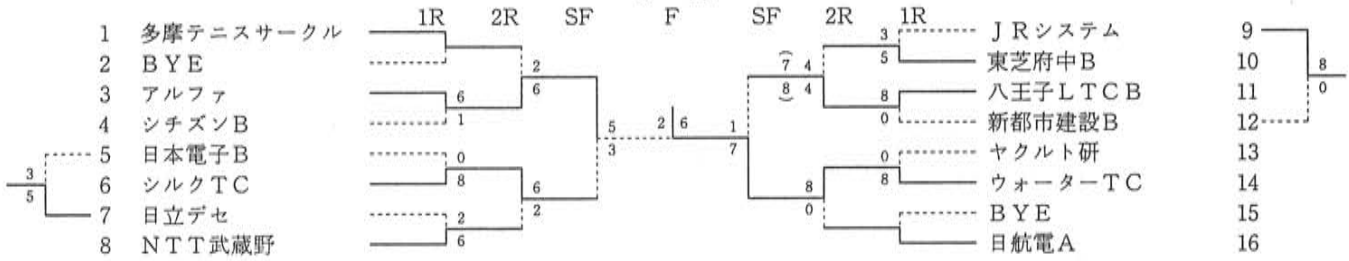


大会戦績

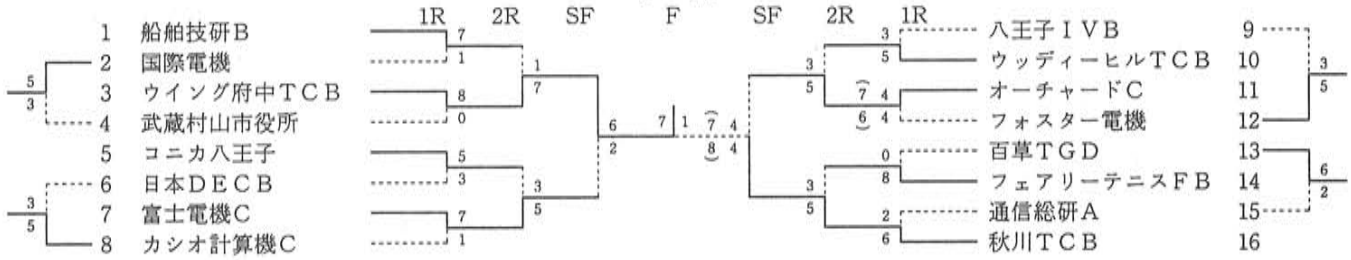
7　部



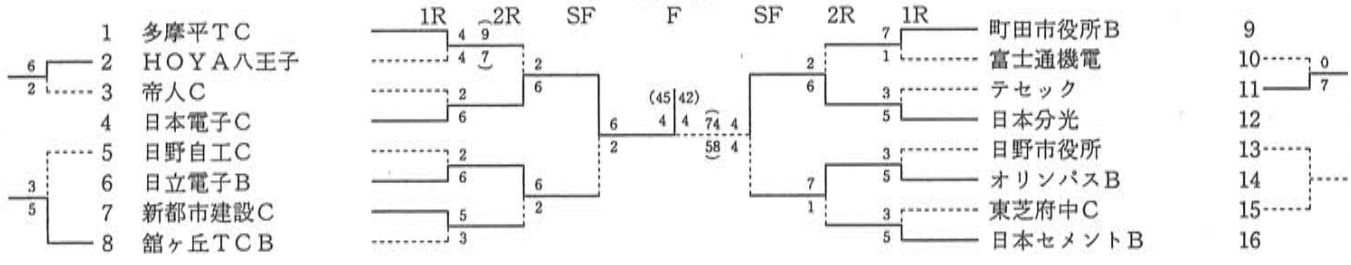
8　部



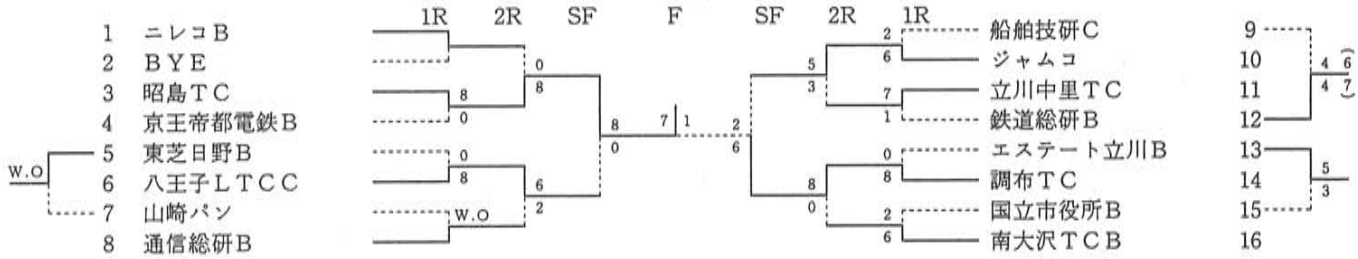
9　部



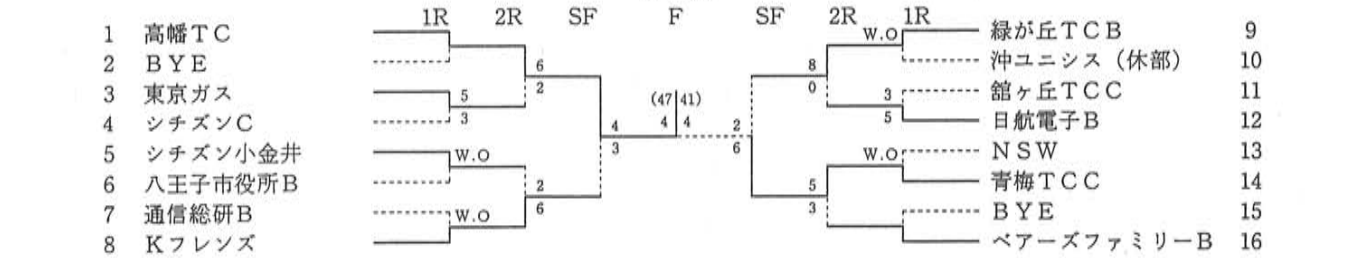
10　部



11　部



12　部



ダブルス選手権戦績

回	年	男子一般 ペア	男子一般 優勝	男子一般 準優勝	男子壮年 ペア	男子壮年 優勝	男子壮年 準優勝	女子 ペア	女子 優勝	女子 準優勝	混合 ペア	混合 優勝	混合 準優勝	OL ペア	OL 優勝	OL 準優勝
1	43	33	吉村・八木（多摩平ク）	船引・三橋（多摩平ク）												
2	44	56	吉村・八木（多摩平ク）	服部・菅沢（多摩平ク）												
3	46	79	井沢・石井（小西六日野）	吉村・八木（多摩平ク）				24	面木・矢崎（多摩平ク）	小関・富田（小西六日野）						
4	47	100	吉村・船引（日野市民ク）	井沢・石井（小西六日野）				25	神保・佐々木（日野市民ク）	面木・矢崎（日野市民ク）						
5	48	116	吉村・船引（日野市民ク）	鈴木・中込（鉄道学園）				25	岡野・松岡（日中） 富田・島崎（小日）	神保・佐々木（日中） 府川・下田（小日）						
6	49	200	吉村・船引（日野市民ク）	服部・菅沢（オリンパス）				50	横田・Stamp（滝山中央）	辻・村野（滝山中央）						
7	50	240	右田・宮尾（電波研）	門倉・桑原（帝人中研）				36	辻・村野（滝山中央）	横田・Stamp（滝山中央）						
8	51	252	吉村・船引（日野市民ク）	森永・沢野（立川ク）	21	杉山・桜井（鉄道技研）	桑原・杉田（小西六日野）	50	小沢・村野	児玉・寺尾（滝山中央）						
9	52	282	黒津・沢（小西六八王子）	藤田・阿部（小西六日野）	23	杉山・桜井（鉄道技研）	朝倉・五関（鉄道技研）	51	寺尾・佐野（滝山中央）	長尾・山部（滝山中央）						
10	53	312	岩竹・星野（富士電機）	藤田・阿部（小西六日野）	18	柴田・松本（電波研・小金井市民ク）	加藤・和田（日野市民ク）	104	藤井・山部（滝山中央）	伊木・金城（小金井市民ク）						
11	54	192	佐藤・松本（日立中研）	前田・小倉（日本電子）	14	朝倉・五関（鉄道技研）	柴田・松本（電波研・小金井市民ク）	93	加藤・佐野（立川ク）	三和・仁平（立川ク）						
12	55	280	吉村・小原（日野オフセット）	松山・三井（八王子ローング）	26	朝倉・五関（鉄道技研）	杉山・桜井（鉄道技研）	125	小林・佐野（立川ク）	柴田・今村（緑道）						
13	56	304	中込・横内（鉄道学園）	佐藤・松本（日立中研）	27	朝倉・五関（鉄道技研）	牛山・鳴海（鉄道技研）	120	山田・薄衣（緑道）	加藤・柴田（立川ク）						
14	57	264	吉本・樋口（ユネスコ村）	川崎・高田（富士電機）	24	石井・太田（小西六日野）	朝倉・五関（鉄道技研）	124	大前・広原（緑道）	加藤・柴田（立川ク）						
15	58	298	中込・戸田（鉄道学園）	堀内・武政（フォスター）	24	前橋・塩出（船舶技研）	石井・井沢（小西六日野）	132	大前・広原（緑道）	石原・遠藤（HLTC）						
16	59	351	鈴木・諸富（ユネスコ村）	石垣・岩佐（緑ケ丘TC）	28	杉田・佐藤（日立中研）		118	石原・網島（HLTC）	松山・早川（八王子ローン）	42	武藤・佐野（立川テニスク）	高久・今井（東芝日野）			
17	60	308	槻木・小池（鉄道技研）	西野・牧野（瀬川TC）	25	佐藤・杉田（日立中研）	塩出・前橋（船舶技研）	74	石原・網島（百草TG）	上田・石島（瀬川TC）	21	吉本・乾（ユネスコ村TC）	前田・畑（日本電子）			
18	61	287	田中・金原（新都市市施設）	石垣・岩佐（緑ケ丘TC）	20	佐藤・杉田（日立中研）	浜口・道村（緑ケ丘TC）	60	石渡・清水（瀬川TC）	石原・網島（百草TG）	30	吉本・乾（ユネスコ村TC）	三上・高橋（ユネスコ村TC）			
19	62	158	野村・高橋（IHI田無・日本分光）	石垣・岩佐（緑ケ丘TC）	16	加茂・野沢（国立市役所）	渡島・和田（IHI田無）	58	石原・網島（百草TG）	原・若林（ユネスコ村）	50	高橋・惣福（百草TG）	吉本・乾（ユネスコ村）			
20	63	229	関根・後藤（百草TG）	小林・北林（ニレコ）	14	永田・藤田（八王子ローン）	渡島・和田（IHI田無）	39	石原・網島（百草TG） 原・川村（ユネスコ村）	高橋・惣福（百草TG） 吉本・乾（ユネスコ村）						
21	平成元	A 122 B 87	阿部・三浦（コニカ日野） 安村・中村（ケンウッド）	奥山・岩田（府中TC） 大滝・田所（HOYA）	12	平井・和田（IHI田無）	沖津・宮崎（百草TG）	31	原・大前（ユネスコ村）	森岡・井上（エステート）	25	吉本・乾（ユネスコ村）	阿部・一村（府中TC）			
22	2	A 77 B 126	金原・日浦（東芝青／日） 笠間・福田（東芝青梅）	香西・南波（日立電子） 高松・岡本（OGTC）	23	沖津・末広（百草TG）	門倉・黒津（帝人・コニカ）	15	伊藤・風間（エステート）	遠山・佐藤（ユネスコ）	32	吉本・川村（ユネスコ）	三上・高橋（ユネスコ）	34	宇野・松元（日立電子）	作道・高木（武蔵台TC）
23	3	A 65 B 179	槌原・内藤（ブリヂストン） 佐々木・山林（日本無線）	安部・三浦（コニカ日野） 小林・北野（ニレコ）	16	安部・石井（コニカ日野）	笠井・左内（百草TG）	14	惣福・梶野（八王子LTC）	原・三上（ユネスコ）	53	高橋・惣福（八王子LTC）	吉本・北村（ユネスコ）	28	平島・佐々木（YHP）	池田・大貫（YHP）
24	4	A 65 B 213	槌原・内藤（ブリヂストン） 阿部・木下（シチズン）	石田・石田（NEC府中） 小林・北野（ニレコ）	27	吉本・中込（ユネスコ）	田上・小峰（日野自工）	16	加藤・石原（八王子LTC）	斉藤・長田（府中TC）	53	三上・大須賀（立川TC）		34	芳賀・東海林（FRTC）	作道・高木（武蔵台TC）
25	5	A 60 B 103	黒木・福田（新都市公社） 倉川・進藤（多摩エンジェ）	吉岡・山口（オリンパス） 中山・肥後（多摩エンジェ）	13	吉村・石田（日野オフ・松が谷）	田上・小峰（日野自工）	9	寺田・山本（多摩エンジェルス）	村田・大麻（日本DEC）	20	鈴木・鈴木（多摩エンジェルス）	伊賀上・阿二（三ツ木ローン）	25	大高・芳賀（FRTC）	種村・諸橋（日野市役所）
26	6	A 61 B 149	野口・小野寺（三ツ木ローン） 小峯・渡辺（日航電・ジャムコ）	吉岡・山口（オリンパス） 市倉・高橋（館ケ丘TC）	12	松山・惣福（八王子ローン）	広田・牛島（ブリヂストン）	8	高森・鈴木（立川TC）	藤井・小林（立川TC）	36	東松・甲府方（立川TC）	矢野・三上（立川TC）	34	大高・芳賀（FRTC）	柴田・柴崎（日野自工）

ＯＬリーグ成績

大会名	年度	優勝	準優勝		参加
1984 第１回	59年春	日野自工	日立中研(A)		8
第２回	〃 秋	電波研	日立中研(B)		10
第３回	60年春	日立中研(A)	立川ＧＭ(B)	電波研	16
第４回	〃 秋	ＹＨＰ(A)	電波研		16
第５回	61年春	日産自動車	立川ＧＭ(A)	ＹＨＰ(B)	20
第６回	〃 秋	ＹＨＰ(A)	立川ＧＭ(B)	日立中研(B)	20
第７回	62年春	日立中研(C)	立川ＧＭ(A)	日立中研(B)	24
第８回	〃 秋	日本電気(A)	八王子市役所	日野自工	21
第９回	63年春	日野自工	オーチャード	日立武蔵	23
第10回	〃 秋	日野市役所	立川ＧＭ	オーチャード	21
第11回	元年春	日本電気	日野市役所	日立武蔵	20
第12回	〃 秋	立川ＧＭ	日立武蔵	帝人	19
第13回	２年春	三ツ木ローン	日野自工	むさし台ＴＣ	21
第14回	〃 秋	三ツ木ローン	むさし台ＴＣ	ＣＲＬ	18
第15回	３年春	立川ＧＭ(B)	ベアーズファミリー	コニカ日野	20
第16回	〃 秋	立川ＧＭ(B)	町田ロイヤル	日立武蔵	20
第17回	４年春	八王子アイビー	むさし台ＴＣ	日立武蔵	19
第18回	〃 秋	日本電気	日立武蔵	立川ＧＭ(B)	18
第19回	５年春	立川ＧＭ	ＣＲＬ	日野自工	20
第20回	〃 秋	日野自工	シチズン時計	ウォーターＣ	21
第21回	６年春	日立武蔵	シチズン時計	むさし台ＴＣ	24
第22回	〃 秋	調布ＴＣ	日野自工	ベアーズファミリー	24

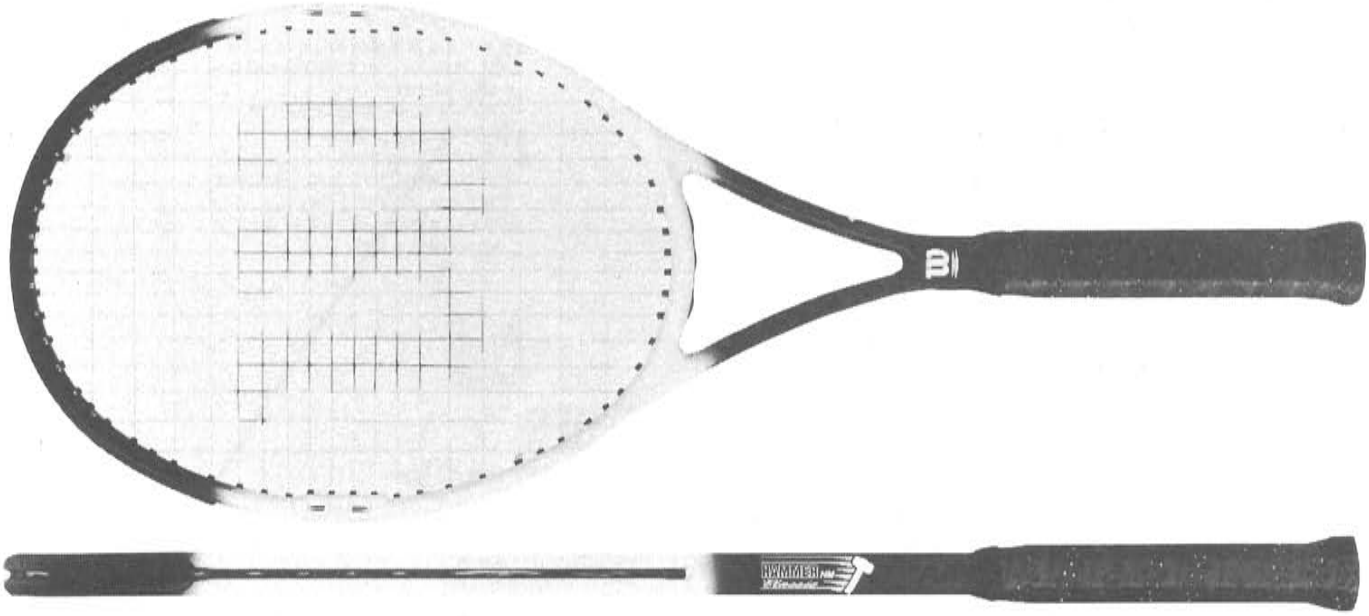
分布一覧

	市町名	団体数	会員数
1	八王子	22	1,117
2	日野	14	640
3	府中	13	440
4	立川	11	420
5	小平	5	278
6	昭島	6	259
7	町田	5	199
8	国分寺	4	193
9	多摩	5	148
10	羽村	4	147
11	青梅	3	129
12	三鷹	3	124
13	国立	3	109
14	秋川	3	104
15	小金井	2	98
16	武蔵村山	4	98
17	田無	2	95
18	調布	3	91
19	武蔵野	2	76
20	東久留米	2	66
21	稲城	2	56
22	東大和	2	51
23	東村山	1	36
24	清瀬	1	28
25	瑞穂	1	24
	計	123	5,026

30周年記念事業
指導者講習会
於 昭和の森
'95 2 5

プロが選んだ、世界を狙う新ハンマーラケット。 ATPランキング6位、トッド・マーチンが選んだ新しい攻撃力。それが、ウイルソンのハンマーHMクラシック。「超軽量トップウエイト設計」という革新的ラケット理論と究極の反発性能を誇るウルトラ・ハイモジュラス・グラファイトから生まれたプロフェッショナル・ラケットである。バランスポイントを大胆にラケット上部に移行し、これまでの軽量ラケットでは考えられなかった、驚異的なパワー性能をものにしたのだ。もちろん、スピン性能、コントロール性能、打球感という課題も高い次元でクリア。21世紀のラケットを実感させる、ウイルソンのハンマーラケット。いま世界のトッププロたちが、注目しはじめた。

HAMMER HM CLASSIC 95 トッド・マーチン使用のハンマーラケット。ウルトラ・ハイモジュラス・グラファイト使用により、一般的なカーボンに比べて弾性率を約90%アップ。フレーム厚22mmながらハンマーシステム採用により驚異的な反発力を実現。●素材：ハイモジュラス・グラファイト＋ウルトラ・ハイモジュラス・グラファイト＋グラファイト ●フレーム厚：22mm均一厚 ●SWING INDEX：4.2 ●サイズ：2、3 ●ウエイト：274～289g ●バランス：34.0－36.0cm ●価格：¥32,000



あなたのテニスが打って変わる。超軽量ハンマーラケット。

HAMMER

ウイルソン ジャパン株式会社 本社/〒141 東京都品川区西五反田8-9-5ポーラビル12F TEL.(03)3491-7813代 大阪支店/〒550 大阪市西区北堀江2-2-25久我ビルヂング南館8F TEL.(06)541-9681 ●表示価格に消費税は含まれておりません。

祝 30 周 年

Shibahara

Tennis & Badminton

TACHIKAWA・0425-24-1059　HACHIOJI・0426-46-1026

設立30周年記念誌

平成7年3月

多摩社会人庭球連盟

編集発行人　下村按理

印刷所　㈱ゆたか印刷